

「パリサイ派の儀式主義との対決」

ルカ 11 : 37~54

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① 前回は、ベルゼブル論争の結論が民衆レベルにまで浸透していることを学んだ。
- ② 群衆は、イエスを試して、「天からのしるし」を求めた。
- ③ イエスは、「ヨナのしるし」以外は与えられないと答えた。
- ④ さらに、イエスのことばは「あかり」であると教えた。
- ⑤ 健全な目を持っている者は、心に光が差し込み、光の中を歩むようになる。
- ⑥ きょうの箇所はその続きで、律法の専門家がイエスを試そうとする。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「食事の席で、イエスはパリサイ人と律法学者を叱責する」 (§ 107)

ルカ 11 : 37~54

(3) パリサイ人と律法学者の存在は、異邦人にはさほど興味のないことである。

- ① ルカがそれを書いているのは、このテーマに普遍性があるからである。
- ② 純粋な動機から始まったものが、組織化や制度化を経て硬直化することがある。

2. アウトライン

- (1) 食卓での会話 (37~41 節)
- (2) パリサイ人に対する叱責 (42~44 節)
- (3) 律法学者に対する叱責 (45~54 節)

3. 結論 :

- (1) 真の宗教心とは
- (2) 霊的リーダーの責任とは

パリサイ派の儀式主義を反面教師として学ぶ。

I. 食卓での会話 (37~41 節)

1. 37~38 節

Luk 11:37 イエスが話し終えられると、ひとりのパリサイ人が、食事をいっしょにしてください、とお願いした。そこでイエスは家に入って、食卓に着かれた。

Luk 11:38 そのパリサイ人は、イエスが食事の前に、まずきよめの洗いをなさらないのを見

て、驚いた。

- (1) ひとりのパリサイ人が、イエスを食事に招いた。
 - ①食事という動詞は、「アリストアウ」である。
 - ②名詞の「アリストン」は、朝食である。

- (2) ルカ7:36~50と似ている(パリサイ人シモンの家に招かれた)。
 - ①古代世界では、酒宴の席で哲学の議論が交わされた。
 - ②このような酒宴を、ギリシア語で「シンポジウム」という。
 - ③今では、聴衆の前で意見を述べる討論会のことを、「シンポジウム」という。
 - ④ギリシア語の「συμπόσιον(スンプシオン)」。「いっしょに飲む」という意味。
 - ⑤ユダヤ人の間でも、高名な教師を招いてシンポジウムを開く習慣があった。
 - ⑥イエスは、招きに応じた。通常は、公開の「シンポジウム」である。
 - ⑦ルカ7:36~50よりも、さらに激しくパリサイ人を糾弾する場となる。

- (4) イエスに対する非難は、言葉にならない言葉によってなされた。
 - ①パリサイ人たちは、きよめの儀式に異常なほどこだわっていた。
 - ②食事の前には、必ず手をきよめていた(モーセの律法の教えの中にはない)。*もし水がない場合は、3キロ以上歩くことも厭わなかった。
 - ③イエスは、食前のきよめの儀式を行わなかった。
 - ④そのパリサイ人は、驚いた。

2. 39~40節

Luk 11:39 **すると、主は言われた。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や大皿の外側はきよめるが、その内側は、強奪と邪悪とでいっぱいです。」**

Luk 11:40 **愚かな人たち。外側を造られた方は、内側も造られたのではありませんか。」**

- (1) シャマイ学派(パリサイ人の多数派)
 - ①器の内側が汚れていても、外側はきよいことがある。

- (2) ヒレル学派(パリサイ人の少数派)
 - ①器の内側をまずきよめる必要がある。

- (3) イエスの教え
 - ①ヒレル学派を支持した。さらに、「内側」を「心の内側」と解釈した。
 - ②パリサイ人は外面的にはきよく見えたが、内面は強奪と邪悪で満ちていた。
 - ③人の外側を造った神は、内側をも造られた。

④神は、私たちの内側がきよくなることを願っておられる。

*山上の垂訓の内容も、これと同じ教えである。

3. 41節

Luk 11:41 **とにかく、うちのものを施しに用いなさい。そうすれば、いっさいが、あなたがたにとってきよいものとなります。**

(1) 内側がきよくなっていることのひとつの証明は、施しである。

①施しによって救いを得るということではない。

②神の愛に満たされた結果、隣人への愛が溢れ出るのである。

II. パリサイ人に対する叱責(42～44節)

1. 42節：わざわい①

Luk 11:42 **だが、わざわいだ。パリサイ人。おまえたちは、はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神への愛はなおざりにしています。これこそしなければならぬことです。ただし、十分の一もなおざりにしてはいけません。**

(1) パリサイ人たちは、重要なことを軽視し、どちらでもよいことを重視していた。

①彼らは、外見の見かけにこだわっていた。

②儀式の実行に関しては、細部に至るまで厳格であった。

③彼らは、十分の一を納めていた。

*モーセの律法では、祭司やレビ人を支えるために十分の一の規定があった。

*はっか、うん香、あらゆる野菜(ハーブ)への言及はない。

④しかし、隣人愛と神への愛はなおざりにしていた。

2. 43節：わざわい②

Luk 11:43 **わざわいだ。パリサイ人。おまえたちは会堂の上席や、市場であいさつされるのが好きです。**

(1) パリサイ人たちは、自らの栄誉を求めていた。

①会堂の上席が好きだった(会衆に向かって座る半円形の座席)。

②市場で、尊敬のあいさつを受けるのが好きだった。

3. 44節：わざわい③

Luk 11:44 **わざわいだ。おまえたちは人目につかぬ墓のようで、その上を歩く人々も気がつかない。」**

(1) 民19:16～17

「また、野外で、剣で刺し殺された者や死人や、人の骨や、墓に触れる者はみな、七

日間、汚れる。この汚れた者のためには、罪のきよめのために焼いた灰を取り、器に入れて、それに湧き水を加える」

(2) パリサイ人たちは、春になると墓石を白く塗った。

①人目につかない墓に触れると、意図的でなくても、汚れる。

(3) パリサイ人たちは、人目につかない墓のようだ。

①彼らの偽善は、その内側の汚れを隠す。

②彼らの教えに従うと、知らない内に汚れが移る。

Ⅲ. 律法学者に対する叱責 (45～54 節)

1. 45 節

Luk 11:45 **すると、ある律法の専門家が、答えて言った。「先生。そのようなことを言われることは、私たちをも侮辱することです。」**

(1) ルカは、パリサイ人と律法学者を区別している。

①律法学者は「書記」であって、普通はパリサイ人だった。

②彼らは民に律法を教えたが、自分では実行しようとしなかった。

(2) パリサイ人が侮辱されたのは、自分たちが侮辱されたのと同じである。

①それで、イエスに脅しをかけた。

2. 46 節 : わざわい①

Luk 11:46 **しかし、イエスは言われた。「おまえたちもわざわいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本さわろうとはしない。」**

(1) 負いきれない荷物とは、口伝律法のことである。

①律法学者は、民に口伝律法を守るように教えた。

②しかし、そのための助けは何ひとつ提供しなかった。

3. 47～51 節 : わざわい②

Luk 11:47 **わざわいだ。おまえたちは預言者たちの墓を建てている。しかし、おまえたちの父祖たちが彼らを殺しました。**

Luk 11:48 **したがって、おまえたちは父祖たちがしたことの証人となり、同意しています。彼らが預言者たちを殺し、おまえたちが墓を建てているのだから。**

Luk 11:49 **だから、神の知恵もこう言いました。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者を殺し、ある者を迫害する。』**

Luk 11:50 (11:50-51) それは、アベルの血から、祭壇と神の家との間で殺されたザカリヤの血に至るまでの、世の初めから流されたすべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。そうだ。わたしは言う。この時代はその責任を問われる。』

Luk 11:51 (前節を含む)

(1) 彼らは、預言者たちを敬っているかのように振る舞った。

- ① 預言者たちの墓を建てていたが、これは偽善的行為である。
- ② なぜなら、内面では先祖たちと同じ道を歩んでいるからである。
- ③ 「神の知恵」とは、主イエス自身である。

(2) アベルの血からザカリヤの血

- ① アベルは、旧約聖書で最初の殉教者である。
- ② ザカリヤは、旧約聖書で最後の殉教者である。

*2 歴 24 : 21

* 歴代誌第二は、ヘブル語聖書では最後の書である。

(3) すべての殉教者の血の責任を、この時代に問う。

- ① 神からの預言者たちを拒否した罪は、イエスの時代にクライマックスを迎える。
- ② この時代(世代)は、イエスを十字架に付けることになる。

3. 52節 : わざわい③

Luk 11:52 わざわいだ。律法の専門家たち。おまえたちは知識のかぎを持ち去り、自分も入らず、入ろうとする人々をも妨げたのです。」

(1) 律法学者たちは、人々が神のことばから学ぶことを妨害した。

- ① 彼らはイエスを信じなかったし、イエスを信じようとする人々を妨げた。

4. 53~54節

Luk 11:53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者、パリサイ人たちのイエスに対する激しい敵対と、いろいろのことについてのしつこい質問攻めとが始まった。

Luk 11:54 彼らは、イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと、ひそかに計った。

(1) 朝食がどうなったかは、記されていない。

- ① このシンポジウムは、イエスの論敵に怒りの火を付ける結果に終わった。

結論 :

1. 真の宗教心とは

(1) 日本人の宗教心

- ①崇り(たたり)を恐れ、それからの守りを願う心の発露としての信仰心
 - *神仏、霊魂などの超自然的存在が、人間に災いを与えるということ
- ②ご利益を求めるといふ信仰心
 - *家内安全、商売繁盛、交通安全、夫婦円満
- ③そこには、創造主との対話という概念はない。

(2) 創造主とのコミュニケーション

- ①創造主は、天の父である。
- ②創造主を啓示するのは、主イエスのことばであり、存在である。
- ③天の父は、私たちの心を見ておられる。

④1サム16:7

1Sa 16:7 しかし【主】はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」

- ⑤パリサイ人たちは、外面のみを整え、内面のきよめを追及しなかった。

2. 霊的リーダーの責任とは

(1) ルカ11:52

Luk 11:52 わざわいだ。律法の専門家たち。おまえたちは知識のかぎを持ち去り、自分も入らず、入ろうとする人々をも妨げたのです。」

- ①パリサイ人たちは、知識の家に入って真理を学ぼうとしなかった。
- ②それどころか、彼らは知識の家の扉を閉め、そのかぎを隠した。
- ③その結果、その家に入って真理を学ぼうとする人々も入れないようにした。

(2) 彼らは、知識の家の周りに、二重、三重の垣根を立てた。

- ①この垣根は、まさに迷路であった。
- ②パリサイ的論理展開は、イエスの時代には複雑怪奇なものとなっていた。
- ③イエスを旧約聖書が預言するメシアと認めなかったのは、そのためである。
 - *本文の最も明確な意味を、複雑なものとしていた。

(例話)「牧師、宣教師、総辞職」

- ④当時の霊的リーダーたちは盲目であって、民をも盲目にしていた。
- ⑤これ以上の悲劇はない。
- ⑥今の時代はそうではないと、言い切れるか。
- ⑦盲人が盲人の手引きをするなら、ともに穴の中に落ちる。
- ⑧聖書は、単純にそのまま読めば、意味は分かる。

「弟子たちへの教え(1)」

ルカ 12 : 1~12

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① 前回は、パリサイ人の家の食卓での出来事を見た。
- ② イエスは、パリサイ人たちの儀式主義を糾弾した。
- ③ 次にイエスは、律法学者たちの律法主義を糾弾した。
- ④ きょうの箇所は、その文脈の中で読むべきものである。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 108~110 は、ひとかたまりと考えるべきである。

- ① § 108 ルカ 12 : 1~59
- ② § 109 ルカ 13 : 1~9
- ③ § 110 ルカ 13 : 10~21

(3) 内容

- ① ルカ 12 : 1~53 弟子たちへの教え 5つのテーマ
- ② ルカ 12 : 54~13 : 21 群衆への教え 4つのテーマ

(4) アウトライン (12 : 1~53)

- ① 恐れずに証しせよ (12 : 1~12)
- ② 貪欲に注意せよ (12 : 13~21)
- ③ 心配するな (12 : 22~34)
- ④ その日に備えよ (12 : 35~48)
- ⑤ 誤解されることを恐れるな (12 : 49~53)
(今回は①だけを取り上げる)

3. 結論 :

- (1) 赦されない罪とは
- (2) 聖霊の助けとは

弟子たちへの教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

I. 恐れずに証しせよ (12 : 1~12)

1. 1節

Luk 12:1 そうこうしている間に、おびただしい数の群衆が集まって来て、互いに足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに対して、話しだされた。「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善の事です。

- (1) パリサイ人の食卓での教えは、人々を引きつけ、それが大群衆となった。
 - ①パリサイ人に対するイエスの容赦なき糾弾が、人々の関心を呼んだ。
 - ②日頃パリサイ人から苦しめられていた人たちは、溜飲を下げたことであろう。
 - ③イエスは弟子たちに教えたが、その周りでは、群衆が聞いていた。
 - ④ローマは、大群衆の集まりを恐れた。通常は集会許可が必要である。
 - ⑤この段階では、ローマはまだイエスに注目していない。

- (2) 「パリサイ人のパン種に気をつけなさい」
 - ①「パン種」という言葉が比喩的に用いられると、それは「偽りの教え」を指す。
 - ②「パリサイ人のパン種」とは、パリサイ人の偽善のことである。
 - ③内面を隠すために仮面をかぶるのが、偽善である。
 - ④前回取り扱ったテーマは、パリサイ人の偽善であった。

2. 2～3節

Luk 12:2 おおいにかぶされているもので、現されないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。

Luk 12:3 ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。

- (1) 偽善的に生きるのは、愚かなことである。
 - ①やがてすべてが明るみに出されるから。

- (2) 次に、弟子たちの宣教の広がりが預言される。
 - ①今は、弟子たちのメッセージに耳を傾ける人は少数であり、限定的である。
 - ②しかし、十字架、復活、聖霊降臨の時代が来る。
 - ③その時には、弟子たちの働きは世界的なものとなる。
 - ④それは、家の中でささやいていたことを、屋上で言い広めるようなものである。
 - ⑤パレスチナの家屋では、近隣に情報を伝達するためには屋上が最適である。
 - ⑥自らの伝道の広がりに期待する人は、幸いである。

3. 4節

Luk 12:4 **そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。**

- (1) イエスは弟子たちを「わたしの友」と呼ばれた。
 - ①ギリシア語で友は、「フィロス」である。
 - ②この友情関係は、いかなる試練の中でも、恥ずべきものではない。
- (2) 世界宣教が始まると、迫害が起こり、命の危険を感じる状況が訪れる。
 - ①しかし、人間を恐れてはならない。
 - ②人間ができることには限界がある。肉体的な命を奪うことまでである。

4. 5節

Luk 12:5 **恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。**

- (1) 恐れなければならない方がいる。
 - ①「殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方」
 - ②「ゲヘナの意味」
 - *「ゲイ・ヒノム(ヒノムの谷)」＝「ゲヘナ」
 - *モレクの神に子どもを捧げていた場所
 - *ヨシヤ王がそこを破壊した(2列23:10)。
 - *それ以降、エルサレムの町から出るゴミを燃やす場となった。
 - *常時、煙が立ち上っていた。
 - ③日本語訳
 - *「ゲヘナ」という訳：(新改訳)、(文語訳)
 - *「地獄」という訳：(新共同訳)、(口語訳)、(リビングバイブル)
 - *「火と硫黄との燃える池」(黙21:8)と同じである。
- (2) ユダヤ人たちは、この表現が裁き主である神を指していることを理解した。
 - ①裁き主である神を恐れることは、知恵である。
- (3) 信者を迫害する者は、肉体の死よりも恐ろしい永遠の死を経験するようになる。

5. 6～7節

Luk 12:6 **五羽の雀は二アサリオンで売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいません。**

Luk 12:7 **それどころか、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です。**

- (1) 神の守りの教えを補強するためのカル・バホメル(大から小へ)の議論
 - ①雀は、最も安い食用の鳥である。
 - ②2羽で1アサリオン(マタ10:29。最小のローマ銅貨で16分の1デナリ)
 - ③ここでは、5羽で2アサリオン。5羽目はただである。
 - ④そんな雀の一羽でも、神は覚えておられる。
 - ⑤ましてや、神があなたがた人間を忘れることはない。

- (2) 「あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています」
 - ①旧約聖書の表現法で、神の許しがなければ何も起こらないという意味である。
 - ②1サム14:45、2サム14:11、1列1:52

6. 8~9節

Luk 12:8 **そこで、あなたがたに言います。だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子もまた、その人を神の御使いたちの前で認めます。**

Luk 12:9 **しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。**

- (1) ユダヤ人にはなじみのある「天の法廷」での裁きの情景
 - ①天使たちがそこに出席しているのも、ユダヤ人の理解に合致している。
 - ②イエスは、弁護士であり検察官でもある。
 - ③イエスは、この裁判に負けることはない。

- (2) 2種類の人たち
 - ①イエスを人の前で認める者
 - *イエスを救い主と信じる者。真の信者。
 - *イエスは、真の信者を認めてくださる。
 - ②イエスを人の前で知らないという者
 - *イエスを信じない者
 - *第一義的にはパリサイ人を指すが、それ以外の者にも当てはまる。

7. 10節

Luk 12:10 **たとい、人の子をそしることばを使う者があっても、赦されます。しかし、聖霊をけがす者は赦されません。**

- (1) 「赦される」「赦されない」という表現

- ①ユダヤ人たちは、「神の御名」を避けるために、受動態を使うことが多かった。
- ②実際は、「神は赦される」、「神は赦されない」という意味である。
- ③「赦されない罪」については、結論で詳細を解説する。

8. 11～12節

Luk 12:11 **また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。**

Luk 12:12 **言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」**

(1) ユダヤの権威による裁きと、ローマの権威による裁きがあった。

- ①前者の場合は、会堂で裁きが行われた。
- ②鞭打たれることもあった。
- ③後者の場合は、より厳しい裁きが実行された。

(2) 弟子たちには、聖霊の守りが保証された。

- ①事前に弁明内容を考えておく必要はない。
- ②聖霊が、教えてくださる。

結論：

1. 赦されない罪について

「たとい、人の子をそしることばを使う者があっても、赦されます。しかし、聖霊をけがす者は赦されません」(10節)

(1) 「聖霊をけがす」とは、イエスがメシアであることを否定する者である。

- ①イエスは、かずかずの「しるし」を行い、ご自身のメシア性を証明された。
- ②そのひとつに、口をきけなくする悪霊の追い出しがあった。
- ③ユダヤ人たちは、イエスは悪霊のかしらベルゼブルによって悪霊を追い出していると言った。
- ④これは、聖霊を悪霊だと言っているのと同じことである。
- ⑤これは、イエス時代のユダヤ人たちだけが犯すことのできる罪である。
- ⑥イエスは、その罪に加担しないように弟子たちに勧めた。

(2) 信仰が後退した者の罪は、赦される。

- ①その人が神に立ち返ったなら、赦される。
- ②罪責感があることは、「赦されない罪」を犯していないことを証明している。

(例話) 南蛮誓詞と日本誓詞

(3) イエスを拒否したり、罵倒したりする未信者の罪も、赦される。

①キリストを救い主として受け入れることが、条件である。

2. 聖霊の助けについて

「また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです」(11~12節)

(1) これは、聖書研究に対して怠惰であってもいいという教えではない。

①みことばの学び

②祈りの生活、すべて重要である。

(2) これは、第一義的には弟子たちに語られたものである。

①世界に対して福音のメッセンジャーになると、迫害が襲ってくる。

②サンヘドリンからの迫害、ローマからの迫害

(3) 第二義的には、真の信者一般にも適用可能である。

①困難に遭遇した際に、発すべき言葉が与えられる。

②証しの際に、語るべき言葉が与えられる。

③イエスとの友情関係が、ベースにある。

(例話) ハーベスト・タイムの番組収録で

「弟子たちへの教え(2)」

ルカ 12 : 13~21

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パリサイ人の家の食卓で、イエスはパリサイ人たちの儀式主義を糾弾した。
- ②その直後に、イエスの回りにおびたしい数の人たちが集まって来た。
- ③イエスは、弟子たちに、そして、群衆に霊的真理を語った。
- ④今回は、弟子たちへの教え①を学んだ(恐れずに証しせよ)。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 108~110 は、ひとかたまりと考えるべきである。

- ① § 108 ルカ 12 : 1~59
- ② § 109 ルカ 13 : 1~9
- ③ § 110 ルカ 13 : 10~21

(3) 内容

- ①ルカ 12 : 1~53 弟子たちへの教え 5つのテーマ
- ②ルカ 12 : 54~13 : 21 群衆への教え 4つのテーマ

(4) アウトライン (12 : 1~53)

- ①恐れずに証しせよ (12 : 1~12)
 - ②貪欲に注意せよ (12 : 13~21)
 - ③心配するな (12 : 22~34)
 - ④その日に備えよ (12 : 35~48)
 - ⑤誤解されることを恐れるな (12 : 49~53)
- (今回は②を取り上げる)

3. 結論 :

- (1) 本当の豊かさ
- (2) 裁き主イエス

弟子たちへの教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

II. 貪欲に注意せよ (12 : 13~21)

1. 13節

Luk 12:13 群衆の中のひとりが、「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください」と言った。

- (1) 人々は、法的争いが起こると、ラビに裁定を依頼した。
 - ①相続の場合は、兄は弟たちの取り分の2倍を受け取った。
 - ②このように、ユダヤの律法によって各人の相続額は決まっていた。
 - ③それでも、争いは起こった。長子の証明、息子であることの証明。

- (2) さて、群衆の中のひとりが、遺産相続の問題の解決をイエスに依頼した。
 - ①彼の権利が奪われたのか。
 - ②自分の取り分以上のものを欲したのか。
 - ③イエスには、法的に裁定を下す権威はない。
 - ④なぜこの男がイエスに裁定を依頼したかは、結論のところ解説する。

2. 14～15節

Luk 12:14 すると彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」

Luk 12:15 そして人々に言われた。「どんな食欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

- (1) イエスが地上に来られた目的は、罪人を救うためである。
 - ①その目的以外の些細なことに関わるべきではない。
 - ②イエスの目は、十字架に向かっていた。

- (2) イエスは、この問題は、物質的なものではなく霊的なものであることを指摘した。
 - ①命の質 (quality of life) を決めるのは、財産ではなく、存在そのものである。
 - ②命の質を破壊する最大の要因は、「食欲」である。
 - ③紀元1世紀のユダヤ人たちにとっては、驚くべき内容であった。
 - * 農地を持たない小作人も多くいた。
 - * 農夫たちは、自己所有の農地を増やすことが夢であった。
 - ④21世紀の物質文明の中で生きる私たちにも、驚くべき内容である。

- (3) 私たちの人生の物差しは、イエスのそれと同じか。
 - ①この世の物差しでは、富が増せば増すほど偉くなったように感じる。
 - ②イエスの物差しでは、その人の偉大さは存在そのものの内にある。

(例話) イスラエル旅行で、キング・デイビッドホテルに宿泊した話

3. 16～19節

Luk 12:16 それから人々にたとえを話された。／「ある金持ちの畑が豊作であった。

Luk 12:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』

Luk 12:18 そして言った。『どうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。

Luk 12:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』

(1) 群衆が周りにいるので、イエスの教えはたとえ話をういたものとなる。

①たとえ話は、実際生活で体験できることである。

(2) セフォリスの町の発掘で分かったこと

①ナザレの北西6キロに位置する、ガリラヤ地方最大のギリシア風の町である。

②特に、ビザンチン時代に栄えた裕福な町である。

③裕福な不在地主が住む農地に、巨大なサイロ(塔状の倉庫)が建っていた。

④このたとえ話に登場する金持ちは、少数の富豪である。

* 当時は、このようは富豪は人口の1%以下であろう。

⑤彼は、自分で労働する必要がない。

⑥自営農も小作農も、このような富豪のライフスタイルにあこがれていた。

(例話) 英語の「celebrity」と日本語の「セレブ」

* 英語では、有名人、著名人。

* 日本語では、金持ち、優雅な、高級な、などの意味。

(3) セレブの農夫の畑が豊作になった。

①彼は、贅沢な悩みを抱えるようになった。

②作物をどう扱っていいのか分からなくなった。

③考えたすえに、穀物倉の改築を考えた。

④そして、こう言った。

「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ」

⑤誰もが憧れるセレブの生き方

⑥ユダヤ的には、死を考慮に入れないで自己充足している人は、愚か者である。

⑦「今まで楽しく生きてきた。なぜ神を信じる必要があるのか」と問う人がいる。

4. 20～21節

Luk 12:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

Luk 12:21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」

(1) 彼は愚か者である。

- ①時間を自分の所有物のように考えていた。
- ②富を得たことや、将来のために計画することは、罪ではない。
- ③その富をどう用いるかが問題である。

(例話) 紀元4世紀の聖アンブローズ(ミラノの大司教)

「貧しい人々の懐、やもめの家、子どもたちの口、これらこそが永遠に残る倉である」

(2) 愚か者の悲劇

- ①地上では富を貯める。
- ②しかし、彼の計画は墓の中で終わる。
- ③その人は、神の前に富まない者である。
- ④詩14:1

「愚か者は心の中で、『神はいない』と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行っている。善を行う者はいない」

結論：

1. 本当の豊かさ

(1) 今日、「食欲」が危険であることを認識している人は、ほとんどいない。

- ①「どんな食欲にも注意して、よく警戒しなさい」
- ②金持ちになることは、危険なことである。

(2) 十戒の規定を思い出そう。

- 第6戒：殺してはならない。
- 第7戒：姦淫してはならない。
- 第8戒：盗んではならない。
- 第9戒：偽りの証言をしてはならない。
- 第10戒：あなたの隣人の家を欲しがってはならない。

(3) 第10戒は、食欲を戒めている。

- ①第10戒を破っても、罪人と呼ばれることはまずない。
- ②その人は、起業家、意欲的な人、積極的な人、などと呼ばれたりする。

(4) 本当の豊かさは、所有している富ではなく、存在そのものにある。

(例話) ビル・ゲイツの回答(マイクロソフトのCEOで、世界一の富豪)

- ①1997年、シアトルでの科学者の会議で、1,500人の聴衆を前に講演した。
- ②講演の後で、ジョン・キレイ博士(医師で哲学博士)が立って質問した。
- ③もし失明したら、全財産を払ってでも視力を回復したいか。
- ④ビル・ゲイツは、そうすると答えた。

(5) 財産がなにもなくても、神に感謝すべきことは多くある。

2. 裁き主イエス

(1) ひとりの男が、相続問題をイエスに持ち込んだ理由は、詩72:1~2にある。

Psa 72:1 神よ。あなたの公正を王に、／あなたの義を王の子に授けてください。

Psa 72:2 彼があなたの民を義をもって、／あなたの、悩む者たちを／公正をもってさばきま
すように。

- ①これは、メシア的詩篇である。
- ②これによれば、メシアの役割のひとつは、紛争を公正に裁くことである。
- ③メシアは王として、メシア的王国を統治される。

(2) イエスの回答は、出2:14からの引用である。

Exo 2:14 するとその男は、「だれがあなたを私たちのつかさやさばきつかさにしたのか。あ
なたはエジプト人を殺したように、私も殺そうと言うのか」と言った。そこでモーセは恐れて、
きっとあのことが知れたのだと思った。

- ①ある日モーセは、ひとりのヘブル人を救うためにエジプト人を打ち殺した。
- ②翌日、ふたりのヘブル人が争っているのを見て、モーセは悪い方を糾弾した。
- ③するとその男は、モーセを裁き司と認めることを拒否した。
- ④これ以降、モーセは40年間ヘブル人たちの前から姿を消した。

(3) モーセとイエスの類似性

- ①イエスはユダヤ人たちから拒否された。
- ②それゆえ、裁き主としての役割を果たすことができない。
- ③しかし、イエスはやがて王として再臨される。
- ④その時には、公正をもって裁かれる。

(4) 食欲の解決策は、イエスを心に迎えること。

「弟子たちへの教え(3)」

ルカ 12 : 22~34

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パリサイ人の家の食卓で、イエスはパリサイ人たちの儀式主義を糾弾した。
- ②その直後に、イエスの回りにおびたしい数の人たちが集まって来た。
- ③イエスは、弟子たちに、そして、群衆に霊的真理を語った。
- ④これまでに学んだこと
 - *弟子たちへの教え①(恐れずに証しせよ)
 - *弟子たちへの教え②(食欲に注意せよ)
- ⑤今回は、弟子たちへの教え③(心配するな)
- ⑥「心配」「不安」は、すべての人が経験することである。
 - *経済問題、健康、家族のこと
 - *ここでは、経済問題(食物と衣服)に関する不安が取り上げられている。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 108~110 は、ひとかたまりと考えるべきである。

- ① § 108 ルカ 12 : 1~59
- ② § 109 ルカ 13 : 1~9
- ③ § 110 ルカ 13 : 10~21

(3) 内容

- ①ルカ 12 : 1~53 弟子たちへの教え 5つのテーマ
- ②ルカ 12 : 54~13 : 21 群衆への教え 4つのテーマ

(4) アウトライン (12 : 1~53)

- ①恐れずに証しせよ (12 : 1~12)
- ②食欲に注意せよ (12 : 13~21)
- ③心配するな (12 : 22~34)
- ④その日に備えよ (12 : 35~48)
- ⑤誤解されることを恐れるな (12 : 49~53)
(今回は③を取り上げる)

3. 結論 :

- (1) 不安への解決法(1): 正しい自己認識
- (2) 不安への解決法(2): バランス感覚
- (3) 不安への解決法(3): 終末論的確信

弟子たちへの教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

Ⅲ. 心配するな(12:22~34)

1. 22~24節

Luk 12:22 それから弟子たちに言われた。「だから、わたしはあなたがたに言います。いのちのことで何を食べようかと心配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい。

Luk 12:23 いのちは食べ物よりたいせつであり、からだは着物よりたいせつだからです。

Luk 12:24 鳥のことを考えてみなさい。蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。けれども、神が彼らを養ってくださいます。あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです。

(1) 心配が愚かなことである理由(その1)

- ①生きるということは、何を食べるか、何を着るかということ以上のものである。
- ②この時代、暴飲暴食は社会のあらゆる層に影響を与えていた。
 - *ローマ社会での悪癖: 美食と暴飲暴食
- ③それゆえイエスは、食物に関して何度も警告を発している。

(2) 食物と衣服の獲得が人生における最大のゴールとなるなら、それはクリスチャン生活への脅威となる。

- ①キリストに従うことを妨害するものは、すべて脅威である。
- ②クリスチャンの自己認識: 神の国の大使としてこの世に派遣されている。
- ③勤勉に働いて収入を得、将来のことは神に委ねる。これがクリスチャン生活。

(2) 鳥を用いた「大から小への議論」(カル・バホメル)

- ①ギリシア人の哲学者やユダヤ人のラビは、自然界の事象を例に取って教えた。
- ②鳥は、雀とは違って食用にはならない。汚れた鳥である。
- ③鳥は蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もない。
- ④しかし神は、彼らを養ってくださる。

*愚かな金持ちは、倉の建て替えて心を悩ました。

*愚かな金持ちと鳥との対比は、劇的である。

⑤ましてや、あなた方のことを心配して下さらないはずはない。

⑥これは、労働しなくてもいいという意味ではない。

*聖書は、怠惰を厳しく戒めている。

2. 25～28節

Luk 12:25 あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

Luk 12:26 こんな小さなことさえできないで、なぜほかのことまで心配するのですか。

Luk 12:27 ゆりの花のことを考えてみなさい。どうして育つのか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

Luk 12:28 しかし、きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくしてくださることでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。

(1) 心配が愚かなことである理由(その2)

①心配しても、状況を変えることはできない。

(2) 寿命を例に用いた「大から小への議論」(カル・バホメル)

①心配することで、寿命を1時間でも伸ばすことができるか。

*あるいは、身長を少しでも伸ばすことができるか。

②それさえできないのだから、他のより大きなことを心配する必要はない。

(3) ゆりの花とソロモンを用いた「大から小への議論」(カル・バホメル)

①ソロモンは、イスラエルの歴史上最も富を蓄えた王である。

「シェバの女王は、ソロモンのすべての知恵と、彼が建てた宮殿と、その食卓の料理、列席の家来たち従者たちが仕えている態度とその服装、彼の献酌官たち、および、彼が【主】の宮でささげた全焼のいけにえを見て、息も止まるばかりであった」(1列10:4)

②栄華を極めたソロモンでさえ、ゆりの花の美しさには負ける。

*アネモネは最も一般的な花

*白ユリは稀な花

*赤ユリはもっと稀な花

③パレスチナの花は、短命である。

④はかない運命にあるゆりの花でさえも、神は豪華に装ってくださる。

⑤ましてや、あなたがたのことを心配して下さらないはずはない。

⑥それゆえ、衣服のために労力を消耗する生き方は、愚かである。

3. 29～31節

Luk 12:29 何を食べたらよいか、何を飲んだらよいか、と捜し求めることをやめ、気をもむことをやめなさい。

Luk 12:30 これらはみな、この世の異邦人たちが切に求めているものです。しかし、あなたがたの父は、それがあなたがたにも必要であることを知っておられます。

Luk 12:31 何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。

(1) 心配が愚かなことである理由(その3)

- ①心配するのは、異邦人たちのすることである。
- ②異邦人＝真の神を知らない人たち
- ③ユダヤ人たちは、異邦人以下にはなりたくないと考えていた。
- ④神は「自分たちの父」である。しかし、「異邦人の父」ではない。
- ⑤その異邦人のライフスタイルは、物質的な豊かさの追求である。

(2) イエスの弟子たちは、霊的な豊かさを追求する。

- ①霊的な豊かさを追求すれば、物質的に必要なものは与えられる。

(3) 「何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます」(31節)

- ①これが中心聖句である。
- ②「神の国」＝神の支配(霊的な豊かさ)
 - *神との関係の確立
 - *神の御心の実行(義の実行)
 - *神の導きがあるとの実感

4. 32～34節

Luk 12:32 小さな群れよ。恐れることはない。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。

Luk 12:33 持ち物を売って、施しをきなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることはありません。

Luk 12:34 あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです。

(1) 再びイエスは、弟子たちに「恐れるな」と語りかけた。

- ①弟子たちの集団は、自衛力のない「小さな群れ」(羊の群れ)である。
 - ②御国とは、メシア的王国(千年王国)であろう。
 - ③カル・バホメル(大から小へ)の議論
 - *天の父は、御国を与えてくださる。
 - *ましてや、あなたがたの日々の必要は満たされる。
- (2) さらに、自衛力を弱体化させる命令を与えた。
- ①持ち物を売って、施しをする。
 - ②物質に束縛された心を解放する行為である。
 - ③地上に富があれば、それに心を奪われる(優先順位の問題である)。
 - ④天に宝を積むなら、それは安全である。
 - ⑤そして、その人の心は天にある。つまり、地上のことで心配しなくなる。

結論

1. 不安への解決法(1):正しい自己認識

「小さな群れよ。恐れることはない。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです」(32節)

(1) イエスは弟子たちに、「小さな群れ」と呼びかけた。

- ①迫害が襲ってくることを予見した言葉である。
- ②神の守りを約束した言葉である。

(2) クリスマンは弱者であると同時に、勝利者である。

「しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです」(ロマ8:37)

- ①この発言は、勝利主義者のそれではない。
- ②自らの弱さを認識した上での、イエス・キリストにある勝利の宣言である。

(3) 霊的成長とは、謙遜の階段を上ることである。

- ①成功体験によって、ますます謙遜になる人は幸いである。

2. 不安への解決法(2):バランス感覚

「持ち物を売って、施しをなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることはありません」(33節)

(1) キニク学派(古代ギリシア哲学の一派)(Cynics)

- ①幸福とは、外的な条件に左右されない有徳な生活である。
- ②彼らは、無所有と精神の独立を目指した。
- ③そのライフスタイルを徹底的に追求した者は、乞食生活を送った。

(2) エッセネ派(死海写本で有名)

- ①死海のほとりのクムランに住んだ。
- ②彼らは、富の共同所有を実践した。

(3) 初代教会の信徒たちは、これを実行した(使2:44~45、4:32~37)。

- ①その結果、エルサレム教会は貧者の集まりとなった。
- ②アンテオケ教会は、援助金をエルサレム教会に送った。
- ③初代教会は、決して理想的な教会のモデルではない。
- ④「小さな群れ」が失敗を繰り返しながら羊飼いに導かれて行った例である。

(4) イエスは、物の所有を否定してはいない。

- ①人生における優先順位を問題にされた。
- ②命の質(quality of life)は、存在そのものの中にある。
- ③持ち物売って施しをするのは、物質に束縛された心を解放する行為である。

*これを常に行うべき普遍的命令と考える必要はない。

3. 不安への解決法(3):終末論的確信

(1) 前回の学び

- ①人の心は、真空状態ではない。
- ②内に何かを入れる必要がある。
- ③食欲への解決は、イエスを心に迎えることである。

(2) 今回の学び

- ①不安の解消法は、終末論的確信である。
- ②メシア的王国(千年王国)における祝福が約束されている。
- ③神の国のために用いた時間と財は、永遠の宝として残る。

(例話) 米国で、冷凍庫にアイスキャンデーを一杯詰めている家があった。

(例話) ダイエットをする人は、好きなものを貯蔵庫に一杯詰めておくと効果がある。

「弟子たちへの教え(4)」

ルカ 12 : 35~48

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パリサイ人の家の食卓で、イエスはパリサイ人たちの儀式主義を糾弾した。
- ②その直後に、イエスの回りにおびたしい数の人たちが集まって来た。
- ③イエスは、弟子たちに、そして、群衆に霊的真理を語った。
- ④これまでに学んだこと
 - *弟子たちへの教え①(恐れずに証しせよ)
 - *弟子たちへの教え②(食欲に注意せよ)
 - *弟子たちへの教え③(心配するな)
- ⑤今回学ぶこと
 - *弟子たちへの教え④(その日に備えよ)

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 108~110 は、ひとかたまりと考えるべきである。

- ① § 108 ルカ 12 : 1~59
- ② § 109 ルカ 13 : 1~9
- ③ § 110 ルカ 13 : 10~21

(3) 内容

- ①ルカ 12 : 1~53 弟子たちへの教え 5つのテーマ
- ②ルカ 12 : 54~13 : 21 群衆への教え 4つのテーマ

2. アウトライン (12 : 35~53)

- ①恐れずに証しせよ (12 : 1~12)
 - ②食欲に注意せよ (12 : 13~21)
 - ③心配するな (12 : 22~34)
 - ④その日に備えよ (12 : 35~48)
 - ⑤誤解されることを恐れるな (12 : 49~53)
- (今回は④を取り上げる)

3. 結論 :

- (1) しもべに仕える主人
- (2) しもべに全財産を委ねる主人

弟子たちへの教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

IV. その日に備えよ(35~48節)

1. 35~36節

Luk 12:35 腰に帯を締め、あかりをともしていなさい。

Luk 12:36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。

- (1) ここから、第1のたとえ話が始まる。
- (2) 当時のユダヤ人の一般的な認識
 - ①将来の贖いを待ち望み、その実現のために祈っていた。
 - ②しかし、現実生活においては、日々の必要に心が奪われていた。
 - ③例外は、エッセネ派のユダヤ人たち。
 - ④バプテスマのヨハネの登場以来、メシア待望と終末意識が高まっていた。
 - ⑤イエスは、常に目を覚ましていることの重要性を教えた。
 - ⑥たとえ話の中に出て来る主人の帰宅とは、携挙のことである。
- (2) 弟子たちが持つべき自己認識とは何か。
 - ①イエスの弟子とは、主人が留守の間、家を守っているしもべである。
 - *軍隊での歩哨と同じである。
 - ②人々が眠っている間も目を覚まし、いつでも行動に移る準備ができている。
- (3) 「腰に帯を締め」
 - ①帯には、長服を短くまとめる働きがある。
 - ②忠実に役目を果たしていることを示す比喩的言葉。

出12:11

「あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは【主】への過越のいけにえである」
- (4) 「あかりをともしていなさい」
 - ①常に怠りない姿勢で仕えていることを示す比喩的言葉
 - ②婚礼から帰って来る主人を待つしもべのような態度でいなさい。

*この婚礼に意味づけをする必要はない。

③裕福な家には、複数のしもべがいた。

*門番役のしもべもいて、不審者は排除し、家族のためには戸を開いた。

2. 37～38 節

Luk 12:37 帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうに帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。

Luk 12:38 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、いつでもそのようであることを見られるなら、そのしもべたちは幸いです。

(1) ユダヤ式婚宴は、最長7日間続いた。

①通常、遠方からの帰宅の場合は、夜になることはない。

②しかし、主人を待つしもべは、油断してはならない。

(2) 帰宅した主人をすぐに迎えることができたしもべたちは、幸いである。

①主人が給仕をしてくれる。

②ユダヤ式時間区分(夜間を3区分する)

*真夜中(the second watch):午後9時～午前0時

*夜明け(the third watch):午前0時～3時

3. 39～40 節

Luk 12:39 このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。

Luk 12:40 あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。」

(1) 話題は、「どろぼうに押し入れられた家の主人」に変わる。

①どろぼうの来る時間は分からない。

②隙ができた時に、どろぼうが押し入ってくる。

*「押し入る」とは、土壁に穴をあけて入ること。

*扉を破る方が手っ取り早い、困難が伴う。

*裕福な家では、石壁であった。

(2) そのように、人の子の来臨(携挙)の時は分からない。

①それゆえ、イエスの弟子は、油断のない生き方をすべきである。

4. 41 節

Luk 12:41 **そこで、ペテロが言った。「主よ。このたとえは私たちのために話してくださるのですか。それともみなのためなのですか。」**

(1) ペテロが質問を挟む。

①ユダヤ教では、弟子たちがラビに質問し、教えの内容を確認した。

②ペテロがイエスに質問し、たとえ話の内容を確認している。

*たとえ話の適用範囲を確かめている。

*自分たちのためなのか、他の人たちのためでもあるのか。

(2) イエスは、真理を知っているすべての人(弟子)に適用されると教える。

5. 42節

Luk 12:42 **主は言われた。「では、主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食べ物を与える忠実な賢い管理人とは、いったいどれでしょう。」**

(1) ここから、第2のたとえ話が始まる。

①第2のたとえ話は、第1のたとえ話の内容をさらに説明したものである。

(2) 忠実な賢い管理人の話である。

①裕福な家では、しもべの上に立つ管理人が置かれていた。

②管理人の中心的な使命は、しもべたちの管理である。

*財産ではなく、人の方が重要である。

③直前の文脈で、イエスは貪欲と物質主義に気を付けるように命じていた。

6. 43～44節

Luk 12:43 **主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。**

Luk 12:44 **わたしは真実をあなたがたに告げます。主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。**

(1) 家のしもべたちの霊的状态に関心を払っているしもべ(管理人)は幸いです。

①それを見た主人は大いに喜び、そのしもべに褒賞を与える。

②自分の全財産を任せるようになる。

(2) しもべの中で、昇進という制度があった。

①一般の農夫よりも権力と地位と富を有する奴隷もいた。

②後に、その富を使って自由人の地位を買い取ることもできる。

7. 45～46節

Luk 12:45 ところが、もし、そのしもべが、『主人の帰りはまだだ』と心の中で思い、下男や下女を打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めると、

Luk 12:46 しもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、不忠実な者どもと同じ目に合わせるに違いありません。

(1) 管理人は、主人が留守の間だけ、下男や下女を虐待することができた。

① 当時、不在地主や不在家主は、決して珍しいことではなかった。

* 遠方に他の財産を有する人たちがいたのである。

② 主人が留守であるということは、誘惑の原因となった。

* 他の奴隷たちの虐待、暴飲暴食など。

* 主人の財産の侵害である。

* 奴隷たちもまた、主人の財産である。

(2) この管理人は、自称イエスの弟子である。

① 彼らは、実は不信者である。

② これは、パリサイ人たちへの言及であろう。

③ さらに、終末時代における民の指導者たちであろう。

(3) ところが、予期せぬタイミングで主人が帰って来る。

① キリストの再臨は、本物の信者と偽の信者の違いを明らかにする。

② 主人は、彼を厳しく罰して、他の不忠実な者どもと同じ目に合わせる。

③ 「cut him in pieces」(バラバラに切り裂く)

* 異教の地では、こういう残酷な刑が実行された例がある。

* 不信者と同じ目に合わせるとは、まともな埋葬が拒否されるということ。

* ユダヤ的には、不信者がゲヘナに投げ込まれるという教えである。

8. 47～48節

Luk 12:47 主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。

Luk 12:48 しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しで済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。

(1) 主への奉仕とその報いに関する大原則が教えられている。

① 多く与えられた者は、より厳しい基準で裁かれる。

(2) 信者に関して

- ①千年王国においては、忠実度に応じて、褒賞の段階がある。
- (3) 不信者に関して
 - ①ゲヘナにおいては、神の御心に関する理解度に応じて裁きの段階がある。
 - ②すべての人には、なんらかの量の情報が与えられている。
 - *自然界を通した啓示
 - *良心
 - *みことば

結論

1. しもべに仕える主人

「帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうか帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます」(37節)

- (1) ヨハン・アルブレヒト・ベンゲル(18世紀前半に活躍したドイツ人神学者)
 - ①新約聖書の本文研究の草分け的存在
 - ②本文批評の原則を最初に確立した学者
 - ③彼は、「この聖句は、神のことば全体の中で最も驚くべきものである」という。

(2) ピリ2:6~7

「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました」

- ①キリストは神として永遠の昔から存在しておられた。
- ②しかし、私たちに対する愛のゆえに、神としての在り方に固執されなかった。
- ③その結果が、神の子の受肉である。
- ④イエスは、仕える者の姿を取られた。
- ⑤十字架の死に至るまで、忠実に歩まれた。
- ⑥そして今は、父なる神の右に座しておられる(栄光の座におられる)。
- ⑦今は、大祭司として私たちのために執りなしをしておられる。
- ⑧やがてイエスは、王として再臨される。
- ⑨その王が、忠実なしもべたちのために給仕をしてくださるのである。

2. しもべに全財産を委ねる主人

「主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。わたしは真実をあなたがたに告げます。主人は彼に自分の全財産を任せるようになります」

(43～44節)

(1) ここでの褒章とは、千年王国においてキリストとともに統治することと関係があるのだろう。

(2) 1ペテ5:1～4

「そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現れる栄光にあずかる者として、お勧めします。あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けるのです」

①ペテロは、イエスのたとえ話を覚えていて、それを長老たちに適用している。

②将来のご褒美は、神の御心を行うための動機となる。

(例話) 中学2年の時のアルバイト。額は決まっていなかったが、楽しみだった。

「弟子たちへの教え(5)」

ルカ 12 : 49~53

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①パリサイ人の家の食卓で、イエスはパリサイ人たちの儀式主義を糾弾した。

②その直後に、イエスの回りにおびたしい数の人たちが集まって来た。

③イエスは、弟子たちに、そして、群衆に霊的真理を語った。

④これまでに学んだこと

*弟子たちへの教え①(恐れずに証しせよ)

*弟子たちへの教え②(食欲に注意せよ)

*弟子たちへの教え③(心配するな)

*弟子たちへの教え④(その日に備えよ)

⑤今回学ぶこと

*弟子たちへの教え⑤(誤解されることを恐れるな)

*セールスマンの恐れ

*現代のクリスチャンの恐れ

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 108~110 は、ひとかたまりと考えるべきである。

① § 108 ルカ 12 : 1~59

② § 109 ルカ 13 : 1~9

③ § 110 ルカ 13 : 10~21

(3) 内容

①ルカ 12 : 1~53 弟子たちへの教え 5つのテーマ

②ルカ 12 : 54~13 : 21 群衆への教え 4つのテーマ

2. アウトライン (12 : 35~53)

①恐れずに証しせよ (12 : 1~12)

②食欲に注意せよ (12 : 13~21)

③心配するな (12 : 22~34)

④その日に備えよ (12 : 35~48)

⑤誤解されることを恐れるな (12 : 49~53)

(今回は⑤を取り上げる)

3. 結論：総復習

弟子たちへの教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

V. 誤解されることを恐れるな(49～53節)

1. 49節

Luk 12:49 わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたら、どんなに願っていることでしょう。

(1) イエスは最初、地に平和をもたらすために活動された。

「暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く」(ルカ 1:79)

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」(ルカ 2:14)

「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから」(マタ 5:9)

「神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です」(使 10:36)

(2) しかし、イエスの公生涯の結果は、地に火を投げ込むようなものとなる。

- ①分裂が起こる。
- ②争いが起こる。
- ③迫害が起こる。
- ④流血事件が起こる。

(3) イエスは、真の平和が来る前に、裁きが来なければならないことを知っていた。

- ①「火」とは、神の裁きのことであるが、特に終末的な裁きを指す。
- ②「火」は、罪を清める働きをする。
- ③それゆえ、その「火」がすでに燃えていたらと、イエスは願っている。
- ④火による清めの後に、真の平和が来るからである。

(4) イエスが十字架にかかるまでは、その火が炎のように燃え上がることはない。

2. 50節

Luk 12:50 しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。

(1) 「火によるバプテスマ」

- ①イエスが罪人の身代わりとして受ける裁きのことである。
- ②より具体的には、十字架の死のことである。

(2) この箇所は、ゲツセマネの園での苦悶の前味である。

「いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、『誘惑に陥らないように祈っていなさい』と言われた。そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。『父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。』すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた。イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。イエスは祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに来て見ると、彼らは悲しみの果てに、眠り込んでしまっていた。それで、彼らに言われた。『なぜ、眠っているのか。起きて、誘惑に陥らないように祈っていなさい』」(ルカ 22:40~46)

- ①ここでイエスは、弟子たちの誰もが理解していないことを預言的に語っている。
- ②イエスは、必ず十字架の上で死ぬ。
 - *「火のバプテスマ」の代わりに、「この杯」という言葉が使われている。
 - *ともに、神の裁きを意味する言葉である。
- ③イエスは、大いに苦しむ。
 - *ルカは、「汗が血のしずくのように地に落ちた」と表現している。

3. 51 節

Luk 12:51 あなたがたは、地に平和を与えるためにわたし came と思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。

- (1) イエスは自分を取り戻し、弟子たちの期待を粉碎する。
 - ①イエスの現実主義に注目せよ。
 - ②火による精錬過程を通過せずに、平和を期待するのは、非現実的である。
- (2) イエスの厳しい言葉は、実は、愛の言葉である。
 - ①イエスの奉仕は、結果的に「分裂」を招く。
 - ②イエスの価値観と世界観は、この世のものとは革命的に異なる。
 - ③弟子たちは、消え去る物に固執するのではなく、イエスと同じ価値観に立つべきである。
 - ④イエスは、弟子たちに警告を発し、将来の迫害に対する準備をさせている。

4. 52~53 節

Luk 12:52 今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。

Luk 12:53 父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります」

- (1) ユダヤ人は、家族の絆を重視する民である。
 - ①イエスのことばは、ユダヤ人たちにとっては驚くべきものである。
 - ②一家が分裂する。
 - ③父と息子、母と娘、しゅうとめと嫁が、対抗して分かれるようになる。

- (2) イエスの招きは、応答を要求する。
 - ①その招きに対して、中立な態度はあり得ない。
 - ②イエスは、人々を二分する。
 - ③イエスは、普遍的な人類愛を教えるために来られたというのは、嘘である。
(例話) フルクテンバウム師の体験
 - * 転居
 - * 無視
 - * 勘当と家からの追放

- (3) それゆえ、イエスを信じない人たちからの誤解を恐れてはならない。
 - ①自分から分裂を仕かける必要はない。
 - ②柔和に、愛を込めて、福音を伝えるべきである。
 - ③弟子道には、他者からの誤解、中傷、迫害が最初から内包されているのである。

結論：イエスの理想主義と現実主義

1. 恐れずに証しせよ（12：1～12）

- (1) からだを殺しても、それ以上何もできない人間たちを恐れるな。
- (2) 殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れよ。
- (3) いざという時には、聖霊の助けが与えられる。

2. 食欲に注意せよ（12：13～21）

- (1) 物に支配されている者は、「愚か者」である。
- (2) 本当の豊かさは、所有している富ではなく、存在そのものにある。
- (3) 地上の富に過剰な関心を抱かず、なくならないもののために労する。

3. 心配するな（12：22～34）

- (1) 神が心配してくださる。
- (2) 心配しても、状況を変えることはできない。
- (3) 不安への対処法は、イエスで心を満たすことである。

4. その日に備えよ（12：35～48）

- (1) 常に携拳に備える（いつ起こるか分からない）。
- (2) 主イエスは、しもべに仕える主人である。
- (3) 主イエスは、しもべに全財産を委ねる主人である。

5. 誤解されることを恐れるな（12：49～53）

- (1) 平和が成就する前に、火による清めが来る。
- (2) 主イエスの教えは、革命的であるため、人々を二分する。
- (3) 主イエスの弟子なら、誤解や迫害は、想定済みのことである。

「群衆への教え(1)」

ルカ 12 : 54~59

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①弟子たちへの教え 5つのテーマ
- ②群衆への教え 4つのテーマ
- ③イエスの教えの目的

*群衆は、イエスを目撃し、その教えに耳を傾けてきた。

*しかし、イエスがメシアであることをいまだに信じていなかった。

*そこでイエスは、群衆に信仰の決断を迫った。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 108~110 は、ひとかたまりと考えるべきである。

- ① § 108 ルカ 12 : 1~59
- ② § 109 ルカ 13 : 1~9
- ③ § 110 ルカ 13 : 10~21

(3) 群衆への教え(4つ)

- ①ルカ 12 : 54~59 「今のこの時代」について
- ②ルカ 13 : 1~9 悔い改めについて
- ③ルカ 13 : 10~17 人間が抱える必要について
- ④ルカ 13 : 18~21 御国のプログラムについて
(今回は①を取り上げる)

2. アウトライン

- (1) 自然界に見られるしるし (54~55 節)
- (2) この時代のしるし (56~57 節)
- (3) 裁判のたとえ話 (58~59 節)

3. 結論 :

- (1) イエスの教えの要約
- (2) 私たちにとっての「今のこの時代」

群衆への教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

I. 自然界に見られるしるし(54～55節)

1. 54節

Luk 12:54 群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が起こるのを見るとすぐに、『わか雨が来るぞ』と言い、事実そのとおりになります。

- (1) 西に雲が起こる。
 - ①地中海から雨雲が立ち、東に流れてくる。
 - ②西の雨雲は、雨が降るしるしである。

- (2) 群衆は、知識とそれを受け入れる意志とを持っていた。

2. 55節

Luk 12:55 また南風が吹きだすと、『暑い日になるぞ』と言い、事実そのとおりになります。

- (1) 南風が吹きだす。
 - ①これは、砂漠から吹いてくる熱風である。
 - ②春から夏への移行期に、この風が吹く。
 - ③花や草は、一日で枯れる。(例話) ガリラヤ湖で、南風の体験をしたことがある。

- (2) 群衆は、知識とそれを受け入れる意志とを持っていた。

II. この時代のしるし(56～57節)

1. 56節

Luk 12:56 偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。

- (1) 自然界のしるしは見分けても、「今のこの時代」は見分けることができない。
 - ①群衆は、霊的しるしについては盲目である。

- (2) 「時代のしるし」という言葉
 - ①マタイは、「時代のしるし」という言葉を使っている(マタ16:3)。
*英語では、「the signs of the times」である。
 - ②福音書では、「時代のしるし」とは、メシアの初臨のことである。
 - ③メシアの初臨は、「今の時代」を見分けるための「時代のしるし」である。

2. 57節

Luk 12:57 また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか。

(1) 訳文の比較

「また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか」(新改訳)

「あなたがたは、何が正しいかを、どうして自分で判断しないのか」(新共同訳)

「また、あなたがたは、なぜ正しいことを自分で判断しないのか」(口語訳)

「また何故みづから正しき事を定めぬか」(文語訳)

(2) メシアの初臨がすでに成就していることを認めないのは、彼らの責任である。

①パリサイ的ユダヤ教は、聖書を大幅に再解釈していた。

②そのため、預言者たちが語った預言の本来の意味が不明瞭になっていた。

③その例が、ダニエル書9章の預言である。

*70週の預言と呼ばれる箇所である。

*これは、メシア到来のタイムスケジュールを教えている。

④それゆえ、自ら願うなら、誰でも真理を学ぶことはできる。

⑤彼らは、メシアの到来と、御国の提供を目撃している世代である。

(3) 群衆を糾弾することばの中には、イエスの愛が表現されている。

①イエスは、その世代の者たちに下る裁きを逃れる道があることを教えている。

②その世代の者たちに下る裁きとは、紀元70年に下る物理的な裁きである。

③裁きを逃れる道とは、神との和解である。

④神との和解の必要性について教えているのが、次のたとえ話である。

Ⅲ. 裁判のたとえ話(58～59節)

1. 58～59節

Luk 12:58 あなたを告訴する者といっしょに役人の前に行くときは、途中でも、熱心に彼と和解するよう努めなさい。そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行きます。裁判官は執行人に引き渡し、執行人は牢に投げ込んでしまいます。

Luk 12:59 あなたに言います。最後の1レプタを支払うまでは、そこから決して出られないのです。」

(1) これは借金のゆえの投獄に関するたとえ話である。

①返済できなければ、投獄される。

②次に、奴隷にされる。

③最後の1レプタを支払うまでは、自由人とはなれない。

*やもめの献金はレプタ2枚（マタ12:42）。

*最小単位の銅貨

- ④唯一の望みは、家族や知人が弁済してくれることである。
- ⑤あるいは、貸主と和解することである。

(2) 4種類の人たちが登場する（すべて法律用語）。

- ①告訴する者
- ②役人
- ③裁判官
- ④執行人

(3) たとえ話の適用

- ①4種類の人たちは、すべて神を指していると考えられる。
- ②地上の係争においては、告訴する者との和解が重要である。
- ③ましてや、告訴する者が神であるなら、和解はさらに重要な課題となる。

結論

1. イエスの教えの要約

- (1) 自分が住んでいる時代を見分けるべきである。
- (2) 迫りくる裁きを逃れる道がある。
- (3) その道とは、自ら進んで預言を学び、イエスをメシアとして信じること。
- (4) ユダヤ人信者は、紀元70年の神殿崩壊において、誰ひとり死ななかつた。
- (5) イエスの教えは、その通りに成就した。

「しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。いなかにいる者たちは、都に入ってはけません」(ルカ21:20、21)

- ①熱心党がエルサレムを占拠し、ローマに反乱を企てた。
- ②ローマはエルサレムに進攻した。
- ③ユダヤ人信者たちは、これを終末論的出来事として捉えた。
- ④紀元66年、一時的にローマ軍の包囲が解かれた。
- ⑤ユダヤ人信者たちは、ヨルダン川東岸のペラに逃亡し、滅亡を免れた。
- ⑥紀元68年、ローマ軍は再びエルサレムの包囲を開始した。
- ⑦紀元70年、エルサレムは神殿とともに破壊された。

- ⑧この時、約100万人のユダヤ人たちが殺害された。
- ⑨これを境に、一般のユダヤ人とユダヤ人信者の間に溝ができた。

2. 私たちにとっての「今のこの時代」

(1) 明確な聖書の意味が分からなくなっている時代

(2) 自由主義神学

- ①最初から聖書を神のことばとは認めていない。
- ②一般書店に並んでいるキリスト教関係の本は、ほぼこの系統に属するもの。

③奇跡の否定

* 出エジプト記の奇跡の否定

* 処女降誕の否定

* イエスの神性の否定

④きょうの箇所は、自由主義神学では読み解けない。

* イエスの到来がなぜ「時代のしるし」と言えるのか。

* イエスを信じるのが、なぜ逃れの道なのか。

* イエスはなぜ、エルサレム崩壊を予告できたのか。

(3) 比喩的解釈に基づく神学

①ユダヤ的解釈から離れた結果、比喩的解釈が広まった。

②教会は新しいイスラエルであると教える。

③これを置換神学という。

* 教会がイスラエルに取って代わった。

* 神がイスラエルために立てておられる計画が分からなくなった。

(4) 字義通りの解釈の回復が重要である。

①神は、「時代のしるし」を用意しておられる。

②メシアニックジューの増加

(例話) LCJE（ローザンヌ・ユダヤ人伝道協議会）のジム・メルニック氏

* 9月20日、お茶の水の集会で通訳をした。

* 迫害下のロシアのユダヤ人たち（無神論、ユダヤ性の保持）

* ロシアからの移住

* 最も福音に心が開かれている。

* 救われたロシア系のユダヤ人たちの影響は大である。

(5) 迫りくる裁きと救いの道

①ノアの時代

②イエスの時代

③そして、「今のこの時代」

「群衆への教え(2)」

ルカ13:1~9

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①弟子たちへの教え 5つのテーマ
- ②群衆への教え 4つのテーマ
- ③イエスの教えの目的

*群衆は、イエスを目撃し、その教えに耳を傾けてきた。

*しかし、イエスがメシアであることをいまだに信じていなかった。

*そこでイエスは、群衆に信仰の決断を迫った。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§108~110は、ひとかたまりと考えるべきである。

- ① §108 ルカ12:1~59
- ② §109 ルカ13:1~9
- ③ §110 ルカ13:10~21

(3) 群衆への教え(4つ)

- ①ルカ12:54~59 「今のこの時代」について
- ②ルカ13:1~9 悔い改めについて
- ③ルカ13:10~17 人間が抱える必要について
- ④ルカ13:18~21 御国のプログラムについて
(今回は②を取り上げる)

(4) テーマとしては、前回の続きである。

- ①メシアを拒否した結果、民族的滅びがやって来る。
- ②しかし、個人的にその滅びを免れる道が用意されている。
- ③イエスをメシアとして信じるのが、その道である。

2. アウトライン

- (1) 虐殺されたガリラヤ人たち(1~3節)
- (2) 事故死した人たち(4~5節)
- (3) いちじくの木のとえ話(6~9節)

3. 結論:

- (1) イエスの教えの信頼性
- (2) 悲劇と罪の関係について
- (3) 神の忍耐について

群衆への教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

I. 虐殺されたガリラヤ人たち(1~3節)

1. 前提となる知識

- (1) パリサイ的ユダヤ教の教え
 - ①悲劇的な死を遂げた者は、大きな罪を犯したために、神から裁かれたのである。
 - ②苦難に会うのは、その人に何か原因があるからである。

- (2) 最近、悲劇的な事件が起こり、誰もがそれを知っていた。
 - ①ピラトの残忍な行為
 - ②シロアムの塔の崩壊
 - ③イエスは、この2つの事件に言及する。

2. 1節

Luk 13:1 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。

- (1) 「ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て」
 - ①前回の箇所続きだということが、よく分かる。
 - ②そこにおいてイエスの話を聞いていた人たちがいた。
 - *やって来たのではない。
 - *恐らく、エルサレムのユダヤ人たちであろう。
 - *ガリラヤのユダヤ人とは意識の差がある。
 - *彼らは、律法に精通したエリートたちである。
 - *彼らは、イエスを注意深く見張るように命じられていたのであろう。

- (2) 「イエスに報告した」
 - ①報告とは、ある任務に就いていた人が、その経過や結果について告げること。
 - ②ここは報告ではなく、単に告げたということであろう。
 - ③イエスの話が否定的なものであり、その矛先が自分たちに向けられている。
 - ④そこで、矛先をかわすために、この事件を持ち出したのであろう。

(3) 「ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜた」

- ①この事件に関しては、ここに書かれている以上の情報がない。
- ②ポンテオ・ピラトは、ローマから派遣されたユダヤ総督である。
- ③ピラトは残忍な性格の人間である。
- ④ピラトとユダヤ人の間には、確執があったことが知られている。
- ⑤祭りの期間、彼はカイザリヤからエルサレムに上り、治安維持の指揮を執った。
*総督は、アントニア要塞に滞在した。そこには、ローマ兵が駐屯していた。
- ⑥ユダヤ人の歴史家ヨセフスは、ピラトの蛮行について記録を残している。
*ある過越の祭りで、ピラトは3千人のユダヤ人たちを神殿内で虐殺した。
*同じ理由で、2千人を虐殺したこともあった。

(4) イエスに告げられた事件の概要

- ①ガリラヤ人たちが、神殿でいけにえを捧げようとした。
- ②ピラトは、彼らのことを反逆者(今で言うテロリスト)だと疑った。
- ③そこで、兵士たちを派遣して彼らを虐殺した。
- ④彼らの血は、いけにえの動物の血と混ぜられた。

(5) エルサレムのユダヤ人たちの本音

- ①殺されたのは全員ガリラヤのユダヤ人たちで、自分たちではない。
- ②非難されるべきは、罪深いガリラヤのユダヤ人たちと、ピラトではないか。
- ③しかし、イエスの答えは予期せぬ方向に進む。

3. 2～3節

Luk 13:2 イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。」

Luk 13:3 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。

(1) イエスの回答の中の否定的部分

- ①「そうではない」(ウーキというギリシア語)
*「決してそうではない」(新共同訳)
- ②悲惨な死を遂げる人たちが、他の人たちよりも罪深いというわけではない。
- ③殺されたガリラヤ人たちが、ほかのどんなガリラヤ人たちよりも悪人だということではない。

(2) イエスの回答の肯定的部分

- ①「あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます」
- ②「悔い改める」(メタノエオウというギリシア語)
 - *考え方を変え、行動を変える。
 - *現在形なので、継続した状態、決断を伴った状態である。
- ③「みな同じように滅びます」とは、紀元70年の悲劇のことである。

II. 事故死した人たち(4~5節)

Luk 13:4 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。

Luk 13:5 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

- (1) 今度はイエスの方から、事故死した18人のことを持ち出している。
 - ①この事故に関しても、記録がないのでこれ以上のことは分からない。
- (2) 推測されること
 - ①ピラトは、水の供給を改善するために、水路の工事をしたことが知られている。
 - ②シロアムの塔の崩壊は、この工事の最中に起こったものと推測される。
 - ③その塔が崩壊し、たまたまそこにいた18人が死んだ。
 - (例話) 最近、イスラム教徒が地下モスクを建設したので、城壁に影響が出た。
- (3) 先ほどの教えが繰り返される。
 - ①その人たちは、他のエルサレムのユダヤ人たちよりも悪人だったわけではない。
 - ②悔い改めないなら、みな同じように滅びる。

III. いちじくの木のとえ話(6~9節)

1. 6節

Luk 13:6 イエスはこのようなたとえを話された。／「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。」

- (1) ぶどう園に植えられた一本のいちじくの木
 - ①ぶどう園の空いた場所にいちじくの木を植えることは、珍しくはなかった。
 - ②所有者は、実がなることを期待してその木を植えた。
 - ③ところが、所有者が実を取りに来ても、何もなかった。

(2) 象徴的意味

- ①いちじくの木は、イスラエルを象徴している。
- ②所有者は、父なる神を象徴している。

2. 7 節

Luk 13:7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』

(1) 所有者は、ぶどう園の園丁にあることを命じる。

- ①「ぶどう園の番人」ではなく、「園丁」である。ぶどうの木の手入れをする人。
- ②3年間も実がなることを期待したが、裏切られてきた。
 - *イエスの公生涯は、この時点でおよそ3年が経過していた。
- ③3年待っても実が付かないので、この先の希望がない。
 - *十分時は与えた。
- ④園丁は、イエスを象徴している。

(2) レビ 19 : 23

「あなたがたが、かの地に入って、どんな果樹でも植えるとき、その実はまだ割礼のないものとみなさなければならない。三年の間、それはあなたがたにとって割礼のないものとなる。食べてはならない」

2. 8~9 節

Luk 13:8 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。』

Luk 13:9 もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』

(1) 園丁の執りなし

- ①さらに一年の猶予が欲しい。
- ②いちじくは、肥しを必要としない木であるが、肥しをやってみる。
- ③イエスの切々とした願いが、胸に迫るではないか。

(2) 「それでもだめなら、切り倒してください」

- ①神の忍耐にも限界がある。

結論

1. イエスの教えの信頼性

「そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます」(3節、5節)

(1) 紀元70年にエルサレムが滅びた時、神殿の壁が崩れ、多くのユダヤ人が死んだ。

①シロアムの塔が倒れて18人が死んだのと同じことが起こった。

(2) 紀元70年に神殿内で多くのユダヤ人の血が流され、いけにえの血と混ぜられた。

①ピラトによってガリラヤ人が殺されたのと同じである。

2. 悲劇と罪の関係について

(1) 仏教用語の「因果応報」

①前世における行為の結果が現在における幸不幸であり、現世における行為の結果が、来世における幸不幸である。

②今では一般的に、悪事を働けば悪い結果をもたらすという意味で使用される。

③聖書には、「罪の刈り取り」という考え方があるが、因果応報ではない。

(2) パリサイ人たちは、悲惨な死や悲劇的な出来事を、罪に対する神の裁きと見た。

①イエスの弟子たちも、この教えの影響を受けていた。

「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。『先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を

犯

したからですか。この人ですか。その両親ですか』(ヨハ9:1~2)

②聖書の教えは、これを否定している。

*ヨブ記

*イエスの教え

③「ひとの不幸は蜜の味」

*1994年1月~3月に放送されたTBS制作のテレビドラマ

*悲劇に会った人を見て、その原因を詮索すべきではない。

*自らの生き方を吟味すべきである。

3. 神の忍耐について

(1) いちじくの木所有者は、実がなるまでに4年という期間を提供した。

①イエスの死から、エルサレムの崩壊まで40年間が提供された。

②その間、個人としては、信じるための猶予期間が与えられた。

(2) イザ5:1~6

Isa 5:1 「さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。／そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。／わが愛する者は、よく肥えた山腹に、／ぶどう畑を持っていた。

Isa 5:2 彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、／そこに良いぶどうを植え、／その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、／甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。／ところが、酸いぶどうができてしまった。

Isa 5:3 そこで今、エルサレムの住民とユダの人よ、／さあ、わたしとわがぶどう畑との間をさばけ。

Isa 5:4 わがぶどう畑になすべきことで、／なお、何かわたしがしなかったことがあるのか。／なぜ、甘いぶどうのなるのを待ち望んだのに、／酸いぶどうができたのか。

Isa 5:5 さあ、今度はわたしが、あなたがたに知らせよう。／わたしがわがぶどう畑に対してすることを。／その垣を除いて、荒れすたれるに任せ、／その石垣をくずして、踏みつけるままにする。

Isa 5:6 わたしは、これを滅びるままにしておく。／枝はおろされず、草は刈られず、／いばらとおどろが生い茂る。／わたしは雲に命じて、／この上に雨を降らせない。」

- ①ぶどうの木は、イスラエルである。
- ②ぶどう園の主人は、あらゆることをして、実がなるのを待った。
- ③酸いぶどうしかないなので、神から見放された。

(3) 悔い改めとは

- ①神の忍耐を認識すること。
- ②考え方を一新すること。
- ③その結果、行為が伴う。
- ④豊かな実を付ける人生の必要条件である。

「群衆への教え(3)、(4)」

ルカ13:10~21

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①弟子たちへの教え 5つのテーマ
- ②群衆への教え 4つのテーマ
- ③前回のイエスの教えの要約

- *指導者たちがメシアを拒否したので、民族的滅びがやって来る。
- *しかし、個人的にその滅びを免れる道が用意されている。
- *イエスをメシアとして信じるのが、その道である。
- *自分だけは大丈夫と思ってはならない。
- *神の忍耐が続いているうちに、考え方を変更し、イエスを信じること。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§108~110は、ひとかたまりと考えるべきである。

- ① §108 ルカ12:1~59
- ② §109 ルカ13:1~9
- ③ §110 ルカ13:10~21

(3) 群衆への教え(4つ)

- ①ルカ12:54~59 「今のこの時代」について
- ②ルカ13:1~9 悔い改めについて
- ③ルカ13:10~17 人間が抱える必要について
- ④ルカ13:18~21 御国のプログラムについて
(今回は③と④を取り上げる)

2. アウトライン

(1) 腰が曲がった女の癒し(10~17節)

- ①癒しの業(10~13節)
- ②会堂管理者の憤り(14節)
- ③イエスの教え(15~17節)

(2) たとえ話(18~21節)

- ①からし種
- ②パン種

3. 結論:

- (1) 民族的救い vs 個人的救い
- (2) キリスト教界に関する預言
- (3) リーダーの自己吟味

群衆への教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

I. 腰が曲がった女の癒し (10~17節)

1. 癒しの業

(1) 10~11節

Luk 13:10 イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。

Luk 13:11 すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。

- ①訪問してきたラビに講話を依頼することは、当時の一般的な習慣であった。
- ②その日は、安息日であった。
- ③腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。
 - *背骨が極端に湾曲している。
 - *原因は、「病の霊」によるものである。
 - *18年間も苦しんでいた。
 - *恐らく老女であろう。
 - *後のイエスのことばは、サタンが病の原因であることを明らかにしている。

(2) 12~13節

Luk 13:12 イエスは、その女を見て、呼び寄せ、「あなたの病気はいやされました」と言って、

Luk 13:13 手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあがめた。

- ①イエスが主導権を取って、その女を呼び寄せた。
- ②イエスのことばの訳文を比較する。
 - 「あなたの病気はいやされました」(新改訳)
 - 「婦人よ、病気は治った」(新共同訳)
 - 「女よ、あなたの病気はなおった」(口語訳)
 - 「女よ、なんぢは病より解かれたり」(文語訳)
 - 「Woman, thou art loosed from thine infirmity.」(KJV)
 - 「Woman, you are set free from your infirmity.」(NIV)
- ③ラビ用語としての「解く」(アポルオウという動詞)

*許可する、自由にする。

*無罪宣言をする。

*病気の癒しに関してこの動詞を使用しているのは、この箇所だけである。

④イエスは、その女に手を置いただけである。

⑤癒しは直ちに起こった。

*女は腰が伸びた。

*女は神をあがめた(未完了形。継続した動作)。

2. 会堂管理者の憤り(14節)

(1) 14節

Luk 13:14 **すると、それを見た会堂管理者は、イエスが安息日にいやされたのを憤って、群衆に言った。「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日には、いけないのです。」**

①会堂管理者は、律法の専門家ではない。

*律法学者の教えの影響を受けていた人

②彼は、憤った。

*イエスの行為は、自分が理解している律法から逸脱している。

*自分には、会堂管理者として、過ちを正す責任がある。

③彼は、イエスにではなく、群衆に言った。

④安息日以外の6日の間に、会堂に来て直してもらうがよい。

*まるで、群衆全員の腰が曲がっているかのような言い分である。

*この女は、18年にわたって会堂に来ていたが、癒されなかった。

3. イエスの教え

(1) 15~16節

Luk 13:15 **しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどもき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。」**

Luk 13:16 **この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。」**

①典型的なラビ的教授法である。カル・バホメル(大から小へ)の議論。

②その会堂のメンバーたちは、安息日に家畜の世話をしていた。

③それならなおさらのこと、苦しんでいる女を助けるのは当たり前である。

*彼女は、18年間もサタンに縛られていた。

*安息日にこの束縛を解いてやってはいけないという理由はない。

(2) 17節

Luk 13:17 こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなされたすべての輝かしいみわざを喜んだ。

- ①2つのグループの感情の対比がある。
- ②反対していた者たちは、みな恥じ入った。
- ③群衆はみな、喜んだ。

II. たとえ話(18～21節)

1. からし種

(1) 18～19節

Luk 13:18 そこで、イエスはこう言われた。「神の国は、何に似ているでしょう。何に比べたらよいでしょう。」

Luk 13:19 それは、からし種のようなものです。それを取って庭に蒔いたところ、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」

- ①「○○は、何に似ているでしょう。何に比べたらよいでしょう」
 - *たとえ話を用いて真理を説明する際の常套句
 - *ラビ的議論では、真理の説明のために例話を用いることが認められていた。
- ②イエスは、「神の国」を説明するために、2つの例話を用いた。
 - *「神の国」とは、「奥義としての王国」である。
 - *教会が誕生してから携挙されるまでの間のキリスト教界のことである。
- ③ここでの2つの例話は、すでに語られていたものである。
 - *このタイミングで再度取り上げるのには、ある目的がある。
- ④からし種は、短時間で大きな木に成長する。
- ⑤そこには、空の鳥が巣を作る。
 - *空の鳥とは、猛禽のことである。
 - *キリスト教の教えを利用した異端の出現のことである。

2. パン種

(1) 20～21節

Luk 13:20 またこう言われた。「神の国を何に比べましょう。」

Luk 13:21 パン種のようなものです。女がパン種を取って、三サトンの粉に混ぜたところ、全体がふくれました。」

- ①「奥義としての王国」を説明する2つ目のたとえ話
- ②パン種は、小さな塊でも、大きな影響をもたらす。

③パン種は、キリスト教界の中に広がる誤った教理である。

結論

1. 民族的救い vs 個人的救い

(1) 腰の曲がった女の癒しが、ここに登場するのは大いに意味がある。

- ①イエスが会堂で説教するのは、これが最後である。
- ②指導者たちは、イエスのメシア性を拒否していた。
- ③イエスは、民族全体ではなく、個人を救おうとしておられる。
- ④この女は、「アブラハムの娘」である。

*ユダヤ人の婦人である。

*イエスを信じるユダヤ人である。

(2) この癒しには、象徴的な意味がある。

- ①民族的に起こらねばならなかったことが、個人レベルで起こっている。
- ②サタンの束縛に置かれていた。
- ③腰が曲がっていて、まっすぐに立てない状態であった。
- ④イエスは、サタンの束縛からの自由を提供するために来られた。
- ⑤この女は、それを得て、神をほめたたえた。
- ⑥ユダヤ人たちは、この当然の反応を示さなかった。

2. キリスト教界に関する預言

(1) 2つのたとえ話は、キリスト教界に関する預言である。

- ①ラビ的ユダヤ教は、律法を曲解し、口伝律法という付加物を重視した。
- ②彼らは、「偽善者」である(キーワード)。
- ③イエスは、これと同じことがキリスト教界にも起こることを知っていた。
- ④2つのたとえ話は、弟子たちへの警告である。

(2) からし種の木に宿る「空の鳥」

- ①猛禽である。
- ②悪霊の象徴である。
- ③キリスト教の要素を一部用いて、異なった教えを教える異端の象徴である。

*エホバの証人、モルモン教、統一協会

(3) パン種

- ①3サトンの粉に影響を与える誤った教理である。
- ②キリスト教界の3つの流れ:カトリック、ギリシア正教、プロテスタント
- ③そのすべてに、何らかの誤った教えが存在する。

3. リーダーの自己吟味

(1) イエスは救い主である。

- ①イエスの方から、この女を招いた。
- ②イエスは、名医が患者に触れるように、優しく女に触れた。
- ③イエスは、権威あることばを発し、女を癒した。

(2) 会堂管理者は、イエスとは対照的である。

- ①彼は、職業的宗教家である。
- ②律法に関する知識は豊富である。
- ③会堂を正しく運営することに熱心である。
- ④しかし、彼には愛や同情心がない。

(3) 私たちはどうか。

「次に、偶像にささげた肉についてですが、私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです。しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです」(1コリ8:1~3)

- ①知識は人を高ぶらせる。
- ②知識とともに、愛と謙遜を追及する必要がある。

「宮きよめの祭りにて」

ヨハ 10 : 22~39

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① これまでは、仮庵の祭りの時期に起こったことを扱ってきた。

* 十字架の死の約半年前

② 今回は、宮きよめの祭りの時期に起こったことを扱う。

* 仮庵の祭りから約2ヶ月後、十字架の死の約4ヶ月前

③ 前回のイエスの教えの要約

* 指導者たちがメシアを拒否したので、民族的滅びがやって来る。

* しかし、個人的にその滅びを免れる道が用意されている。

* イエスをメシアとして信じるのが、その道である。

④ 今回の内容

* エルサレムの宗教的指導者たちがイエスに敵対した。

* イエスは彼らに答えた。

* その結果、両者の溝はさらに深くなった。

* 読者の視点：メシアはどういう経緯で十字架にかかって行ったのか。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 111 宮きよめの祭りで、ユダヤ人たちはイエスに石を投げようとした。

2. アウトライン

(1) はじめに (22~23 節)

(2) 対立 (1) (24~30 節)

(3) 対立 (2) (31~32 節)

(4) 対立 (3) (33~38 節)

(5) 結論 (39 節)

3. 結論：2つの重要な教理

(1) 神の選び

(2) 永遠の保証

イエスと宗教的指導者たちの対立を通して、イエスの本質について学ぶ。

はじめに (22～23 節)

1. 時期 (22 節)

Joh 10:22 そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。

(1) モーセの律法には、7つの祭りが出て来る。

①過越の祭り、七週の祭り (ペンテコステ)、仮庵の祭りは、巡礼祭である。

(2) モーセの律法に出てこない祭りが2つある。

①プリムの祭り

*起源は、エステル記に記された解放劇にある。

*ハマンの策略から解放されたことを記念する祭り。

*アダルの月の14日と15日 (太陽暦の2月～3月)

*新約聖書には出てこない (エルサレムではなく、各地で祝われた)。

②宮きよめの祭り (神殿奉献記念祭) (the feast of the dedication)

*ヘブル語で「ハヌカ」(奉献) という。

*前165年、キスレウの月 (第9の月) の25日 (太陽暦の11月～12月)

*セレウコス朝 (アンティオコス・エピファネス) からの解放

・マカベア戦争により、ユダヤ人たちは独立を勝ち取った。

*最初の祭りは、2ヶ月遅れの仮庵の祭りであった。

*8日間、神殿の油が切れなかった。光の祭り。

*パリサイ人たちは、この8日間の祭りの継続を決め、今日に至る。

*欧米では、クリスマスと宮きよめの祭りが、時期的に重なる。

2. 状況 (23 節)

Joh 10:23 時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。

(1) 時期的には、十字架にかかる約4ヶ月前である。

①時は冬であった。ヨハネは、霊的な冬を暗示していると思われる。

②光である方が、光の祭りに姿を現された。

③イエスは、ご自身の命を父なる神に「奉献」しようとしていた。

(2) ソロモンの廊を歩いていた。

①神殿の東側に位置する南北に延びた廊 (屋根付の空間) である。

②ラビたちが講話を語る場所であった。

③イエスは、非常に目立った場所におられた。

I. 対立 (1) (24～30 節)

1. ユダヤ人の指導者たちの糾弾 (24 節)

Joh 10:24 それでユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリストなら、はっきりとそう言ってください。」

(1) ユダヤ人たちとは、エルサレムの指導者たちである。

①彼らは、イエスを包囲した。彼らの強い決意が見える。

(2) 訳文の比較

「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリストなら、はっきりとそう言ってください」(新改訳)

「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」(新共同訳)

「いつまでわたしたちを不安のままにしておくのか。あなたがキリストであるなら、そうとはっきり言っていただきたい」(口語訳)

「何時まで我らの心を惑しむるか、汝キリストならば明白(あらは)に告げよ」

①彼らの理解では、イエスは自分がキリストだとは明言していない。

②彼らは、言葉尻を捕らえてイエスを逮捕しようとしている。

2. イエスの回答 (25～30 節)

Joh 10:25 イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行うわざが、わたしについて証言しています。

Joh 10:26 しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。

Joh 10:27 わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。

Joh 10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

Joh 10:29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。

Joh 10:30 わたしと父とは一つです。」

(1) イエスのメシア性は、明確に証明されている。

①教えによって

②奇跡によって (父の御名によって行うわざ)

(2) 6つの重要な教えが登場する。

- ①信じないのは、彼らがイエスの羊に属していないから(26節)。
- ②信じた人たちは、イエスの声を聞き分ける(27節)。
 - *イエスと信者の密接な関係を示している。
- ③イエスは彼らのことを知っている(27節)。
 - *福音のメッセージを理解し、父なる神の御心に従順に生きる。
- ④彼らは、イエスについて行く(27節)。
 - *福音のメッセージを理解し、父なる神の御心に従順に生きる。
- ⑤彼らには、永遠の保証が与えられている(28節)。
- ⑥彼らをイエスに与えたのは、天の父である(29節)。

(3) イエスと父とは一つである(30節)。

- ①イエスと父が同一人物だということではない。
- ②ユダヤ的には、これはイエスの神性宣言である。
- ③そして、ユダヤ人の指導者たちは、その部分は十分理解した。

II. 対立(2)(31~32節)

1. ユダヤ人の指導者たちの反応(31節)

Joh 10:31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。

(1) ユダヤ人の指導者たちは、イエスのことばの意味をよく理解した。

- ①イエスは、最も明白な方法で神性宣言をしている。

(2) 彼らは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。

- ①理由は、冒とく罪である。
- ②レビ24:16
- ③ヨハ8:59で同様の記事が出て来る。

2. イエスの回答(32節)

Joh 10:32 イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」

(1) イエスの冷静な態度

- ①イエスは、エルサレムにおいて数々の癒しを行われた。
- ②それらの癒しは、父から出て良いわざである。
- ③そのうちのどのわざが、ユダヤ人の指導者たちを怒らせたのか。

III. 対立(3)(33~38節)

1. ユダヤ人の指導者たちの反応(33節)

Joh 10:33 ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするのではありません。冒瀆のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」

- (1) イエスが行った良いわざは、問題ではない。
 - ①安息日の癒しに対しては、怒っていたはずなのに、それに触れていない。
- (2) 人間でありながら、自分を神とするのが問題である。
 - ①イエスが単なる人間だという前提は変えない。
 - ②彼らは、イエスの意図をさらに明確に言葉にしている。
 - ③これが冒とく罪になるのは、イエスが単なる人間である場合のみである。

2. イエスの回答(34~38節)

- (1) ラビ的議論を理解する必要がある。
 - ①旧約聖書から引用し、それを適用しながら論を展開する。
 - ②「あなたがたの律法に、〇〇と書いてはいないか」
 - *ユダヤ人たちは、律法を与えられていることを誇りとした。
 - *ここでは、「律法」は旧約聖書全体を指している。

- (2) イエスが引用したのは、詩82:6である(34節)。

Joh 10:34 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った、おまえたちは神々である』と書いてはいないか。」

- ①詩82篇では、神は裁き主である。
- ②神は、正しい裁きを地上に実現するために、人間の裁き人を立てる。
- ③彼らは、神の代理人として裁きを行う。
- ④そういう意味で、彼らは「神々」である(ヘブル語でエロヒム)。
- ⑤人間の裁き人に神性が宿っているということではない。

(3) 引用聖句の解釈と適用(35~36節)

Joh 10:35 もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから、

Joh 10:36 『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が、聖であることを示して世に遣わした者について、『神を冒瀆している』と言うのですか。

- ①「聖書は破棄されるものではない」とは、イエスの聖書観である。

- ②ここにも、カル・バホメル(大から小へ)の議論がある。
- ③神が立てた人間の裁き人が、「エロヒム」と呼ばれている。
- ④それなら、父から遣わされた者が自分のことを「神の子」と呼ぶのが、なぜ冒とく罪なのか。
- ⑤「聖であることを示し」とは、父の業を行うために選び分かれたという意味。
- ⑥イエスは、父から直接世に遣わされた。

(4) わざがイエスのメシア性を証明している(37~38節)。

Joh 10:37 もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じないでいなさい。

Joh 10:38 しかし、もし行っているなら、たとえわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父にすることを、あなたがたが悟り、また知るためです。」

- ①イエスが行っているわざは、「父のみわざ」である。
- ②イエスのことばが信じられなくても、イエスのわざを信用することはできる。
- ③「父がわたしにおられ、わたしが父にいる」
*これもまた、イエスの神性宣言である。

④ニコデモの言葉

「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません」(ヨハ3:2)

V. 結論(39節)

Joh 10:39 そこで、彼らはまたイエスを捕らえようとした。しかし、イエスは彼らの手からのがれられた。

(1) ユダヤ人の指導者たちはまた、イエスを捕らえようとした。

①ヨハ7:30、32、44、8:20 参照

(2) イエスは、彼らの手から逃れた。

- ①逃れた方法は記されていない。
- ②逃れた理由が重要である。また、時が来ていない。
- ③間もなく、イエスが自らを彼らの手に委ねる時が来る。

結論

1. 神の選び

Joh 10:26 しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。

Joh 10:27 わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。

(1) 分かっていること(人間の責務)

- ①ユダヤ人の指導者たちは、イエスの語っていることを信じなかった。
- ②彼らは、イエスのことばは明瞭ではないと思っていた。
- ③彼らは、自分たちが理解できる枠の中にイエスが入ってくることを求めた。

(例話)「〇〇が分かったら信じる」という人の問題点

- ④自分から聖書の論理に近づく必要がある。

⑤発想の転換

「良いわざのためにあなたを石打ちにするのではありません。冒瀆のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです」(33節)

*イエスは神でありながら、人間になられた。

(2) 分からないこと(神の選び)

- ①神の羊に属さない者は、イエスを信じない。
- ②イエスの羊は、イエスの声を聞き分ける。

(3) 上記(1)と(2)は、ともに信じる必要がある。

2. 永遠の保証

Joh 10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

Joh 10:29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。

(1) イエスの約束は信じられる。

- ①信じる者には、永遠のいのちが与えられている。
- ②信じる者は、決して滅びることがない。
- ③信じる者は、御子と御父によって守られている。

(2) 永遠の保証の教理は、放縦な生き方に道を開くものではない。

- ①私たちは、救いを失わないためにクリスチャン生活をするのではない。
- ②私たちは、クリスチャンになったからクリスチャン生活をするのである。
- ③クリスチャン生活とは、神の愛に対する愛の応答である。

(3) 新約聖書に書かれて警告のことばは、永遠の保証を前提に読む必要がある。

「後の者が先になり」

ヨハ 10 : 40~42、ルカ 13 : 22~35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① 宮きよめの祭りでの出来事

- *ユダヤ人たちの間に分裂が起こった。
- *ユダヤ人たちは、イエスに石を投げようとした。
- *イエスは、そこを無事に逃れた。
- *十字架の死の約4ヶ月前のことである。

② イエスは、エルサレムからペレアに移動する。

- *そこでの奉仕は、収穫が多かった。
- *後の者が先になった。

③ ペレアに滞在していたイエスのもとに、ラザロが病気だという知らせが入る。

④ イエスは、ペレアからベタニヤに向かう。

⑤ きょうのルカの箇所は、恐らく、その途上の出来事であろう。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 112 エルサレムからヨルダン川の東への移動

§ 113 ペレアからエルサレムに向かう途上での教え

2. アウトライン

- (1) 祝された奉仕 (ヨハ 10 : 40~42)
- (2) 悲観的な見通し (ルカ 13 : 22~30)
- (3) 十字架の死に向けての弟子訓練 (ルカ 13 : 31~35)

3. 結論 :

- (1) 再臨の条件
- (2) 後の者が先になり

後の者が先になった経緯について、学ぶ。

I. 祝された奉仕 (ヨハ 10 : 40~42)

1. 40 節

Joh 10:40 そして、イエスはまたヨルダンを渡って、ヨハネが初めにバプテスマを授けてい

た所に行かれ、そこに滞在された。

- (1) 場所は、ヨルダン川の東、ペレアである。
 - ①ここは、サンヘドリンの支配が及ばない地区である。
 - ②バプテスマのヨハネの活動は、主にペレアで行われた。
 - ③ここは、イエスが公生涯を始めた場所でもある。
 - ④イエスは、公生涯の終わりにそこに戻られた。
 - ⑤そこは、中央の宗教的権威からは隔離された、孤独な場所である。

- (2) バプテスマのヨハネは、その地で洗礼を授けていた。
 - ①これは、ヨハネに付くバプテスマである。
 - ②洗礼を受けた人々は、ヨハネの教えを受け入れた。
 - ③洗礼を受けた人々は、メシアが登場した時、その方を信じる決意を表明した。

2. 41～42 節

Joh 10:41 多くの人々がイエスのところに来た。彼らは、「ヨハネは何一つしるしを行わなかったけれども、彼がこの方について話したことはみな真実であった」と言った。

Joh 10:42 そして、その地方で多くの人々がイエスを信じた。

- (1) その地で、多くの収穫があった。
 - ①ユダヤやエルサレムでの状況とは、好対照である。

- (2) 信じた人たちは、バプテスマのヨハネの影響を受けていた。
 - ①ヨハネは、奇跡を行ったわけではない。
 - ②ヨハネは、メシアについて証言し、それがすべて真実であった。
 - ③ヨハネは、メシアの先駆者としての使命を十分に果たした。

II. 悲観的な見通し (ルカ 13 : 22～30)

1. 22 節

Luk 13:22 イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた。

- (1) エルサレムへの途上、ペレアの町々村々を通りながら、教えた。

2. 23～24 節

Luk 13:23 すると、「主よ。救われる者は少ないのですか」と言う人があった。イエスは、人々に言われた。

Luk 13:24 「努力して狭い門から入りなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、入ろう

としても、入れなくなる人が多いのですから。

- (1) ひとりの弟子がイエスに質問した。
 - ①「救われる」とは、イスラエル人が神の国(メシア的王国)に入るということ。
 - ②質問の理由は、イエスが説く神の国のメッセージに応答する人が少ないから。
 - ③ユダヤ人の指導者たちはイエスのメシア性を拒否した。
 - ④民衆も、指導者たちの意見を鵜呑みにしていた。
 - ⑤個人レベルの救いを提供しようとするイエスの働きは、終わりに近づいていた。

- (2) イエスは彼に答えた。
 - ①他人のことはいいから、自分の救いのことを心配しなさい。
 - ②「2つの道」のイメージは、ユダヤ的文書にはよく出て来るものである。
 - ③ここでは、「狭い門と広い門」の対比がある。
 - ④広い門とは、パリサイ派の教えである。
 - *ユダヤ人として生まれたなら、神の国に入れる。
 - ⑤狭い門とは、イエスの教えである。
 - *イエスをメシアと信じる信仰によって、神の国に入れる。
 - *「努力して」とは、業による救いのことではない。
 - ⑥今は「恵みの時」であるが、それが終わる日が来る。
 - *そのことを、宴会を催した主人の例話で教える。

3. 25～27 節

Luk 13:25 家の主人が、立ち上がって、戸をしめてしまってからでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、『あなたがたがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。

Luk 13:26 すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』

Luk 13:27 だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行う者たち。みな出て行きなさい。』

- (1) 神の国は、ユダヤ的には「宴会」にたとえられることが多い。
 - ①救われる目的は、神の国に入るためである。
 - ②神の国に入ることが、宴会の席に付くことで表現されている。

- (2) 家の主人は、立ち上がって戸を閉める。
 - ①恵みの時が終わると、戸は開かない。
 - ②外に立って戸をたたく人たちは、イスラエル人たちである。

- ③いくら懇願しても、戸は開かない。
- ④主人は、「あなたがたがどこの者か、私は知らない」と答える。

(3) そこで彼らは、主人と自分たちは密接な関係にあるとアピールする。

- ①「私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました」
- ②これは、その時代のユダヤ人たちに対するイエスの奉仕への言及である。

(4) 主人は、彼らを家の中に入れてない。

- ①「私はあなたがたがどこの者だか知りません」
- ②「不正を行う者たち」
- ③「みな出て行きなさい」
- ④今イエスを信じなければ、手遅れになる日が来る。
- ⑤その時代のユダヤ人たちにとっては、紀元70年がその日となった。

4. 28～30節

Luk 13:28 神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちが入っているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのです。

Luk 13:29 人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。

Luk 13:30 いいですか、今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです。」

(1) イスラエルの中の信仰者たちは、神の国に入っている。

- ①アブラハム、イサク、ヤコブ
- ②すべての預言者たち
- ③彼らは、真の信仰者たち(イスラエルの残れる者たち)である。

(2) しかし、イエスを信じなかった者たちは、外に投げ出される。

- ①裁きの苦しさが、「泣き叫んだり、歯ぎしりしたり」という言葉で表現される。

(3) 異邦人の救いが預言されている。

- ①「東からも西からも、また南からも北からも来て」とは、異邦人のことである。
- ②神の国で食卓に着くとは、救われていることの描写である。

- (4) 異邦人とユダヤ人の立場が逆転する。
- ①「今しんがりの者」とは、異邦人のことである。
 - ②「いま先頭の者」とは、ユダヤ人のことである。

Ⅲ. 十字架の死に向けての弟子訓練 (ルカ 13 : 31~35)

1. 31 節

Luk 13:31 ちょうどそのとき、何人かのパリサイ人が近寄って来て、イエスに言った。「ここから出てほかの所へ行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうと思っています。」

- (1) ヘロデとは、ヘロデ・アンティパスのことである。
- ①彼の領土は、ガリラヤとペレアである。
 - ②彼はバプテスマのヨハネを殺した。
 - ③イエスのことを、バプテスマのヨハネが復活したと考えている。
 - ④イエスを殺そうと思っているというのは、正しい情報であろう。
- (2) イエスを殺そうとしていたパリサイ人が、なぜイエスを守ろうとしているのか。
- ①イエスをユダヤ、エルサレムに戻そうとしている。
 - ②そこは、サンヘドリンの管轄地域である。
 - ③そこなら、イエスを逮捕することができる。
- (3) しかしイエスは、ご自分のタイムテーブルに従って行動される。
- ①エルサレムに上るとしたら、ご自分の時と目的に沿ってそうする。

2. 32~33 節

Luk 13:32 イエスは言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『よく見なさい。わたしは、きょうと、あすとは、悪霊どもを追い出し、病人をいやし、三日目に全うされます。』

Luk 13:33 だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んで行かなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありませんからです。』

- (1) イエスは、パリサイ人とヘロデの関係を見抜いている。
- ①ヘロデに告げよ。
 - ②「あの狐」(女狐)(あるいは、ヘロデヤを意味しているのかも知れない)
*イエスが人間を表現するために用いた最も悲しい言葉である。
- (2) イエスは、いかなる権威にも屈することはない。
- ①「きょうと、あすとは、」は、格言である。短い期間という意味。

*今しばらくは、なすべき奉仕に励むということ。

②「三日目に全うされます」とは、最後には使命をすべて終えるという意味。

*受難を指した言葉である。

(3) メシアは、ガリラヤやペレアでは死なない。

①神から遣わされた預言者たちは、エルサレムで殺されてきた。

②今回も、預言者の中の預言者である方が、エルサレムで死のうとしている。

③これは、エルサレムに対する糾弾の言葉である。

④ペレアにおいて十字架の影がイエスを覆い、それがエルサレムで成就する。

3. 34～35 節

Luk 13:34 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

Luk 13:35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません。」

(1) ここでルカは、イエスがイスラエルの民を拒否したことを記録している。

①エルサレムとは、イスラエルの民を象徴する言葉である。

②イスラエルの民がイエスを拒否したので、イエスも彼らを拒否する。

(2) イエスは、涙なしにエルサレムを拒否したわけではない。

①イエスの愛と優しさに溢れた奉仕（めんどりがひなを翼の下にかばうように）

②エルサレムがイエスを拒否した（頑固な姿勢）。

(3) エルサレムの町も神殿も、荒れ果てたままに遺される。

①紀元70年以降、そうなった。

(4) 『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません」

①これは、再臨の預言である。

結論

1. 再臨の条件（ルカ13:35）

Luk 13:35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません。」

- (1) 「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」(詩 118 : 26)
- (2) イエスがエルサレムに入場する際に、群衆はこの聖句を引用した(マタ 21 : 9)。
- (3) イエスは、公生涯の最後に、再度この聖句を引用した(マタ 23 : 37~39)。
- (4) 再臨の条件は、ユダヤ人たちがイエスをメシアと信じ、その到来を歓迎すること

と

である。

- (5) 再臨の希望を語りながら、ユダヤ人の救いに無関心なのは、一貫性がない。

2. 後の者が先になり

- (1) ペレアのユダヤ人とエルサレムのユダヤ人の対比
- (2) 異邦人とユダヤ人の対比
- (3) ユダヤ人たちは、なぜイエスを信じなかったのか。
 - ①数百年にわたるパリサイ的教えの影響
 - ②口伝律法を垣根のように巡らせたので、聖書のメッセージが分からなくなった。
 - ③イエスをメシアと認識できなくなった。
- (4) イエスの教えは、革命的なものであった。
 - ①彼らは、アブラハムの子孫であれば、神の国に入れると思っていた。
 - ②さらに、ユダヤ人だけが神の国に入ると思っていた。
 - ③イエスが教えた異邦人の救いは、彼らにとっては驚くべき内容であった。
- (5) 私たちへの適用(1コリ 1 : 26~31)

1Co 1:26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんください。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。

1Co 1:27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。

1Co 1:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。

1Co 1:29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

1Co 1:30 しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。

1Co 1:31 まさしく、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

「パリサイ人の家での教え」

ルカ 14 : 1~24

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、エルサレムからペレアに移動する。
- ② 次に、ペレアからエルサレム(ベタニヤ)に向かう。
- ③ その途上で、「後の者が先になる」というメッセージがなされた。
 - * エルサレムの宗教的指導者たちではなく、ペレアの庶民たちが先になる。
 - * ユダヤ人ではなく、異邦人が先になる。
- ④ きょうのルカの箇所はその続きで、同じテーマを取り上げている。
 - * 前回は、神の国に入れない者に焦点が合わされた。
 - * 今回は、神の国に入れる者に焦点が合わされる。
- ⑤ 場面は、パリサイ人の家での食卓である。
 - * 招待されたラビであるイエスが、食卓に着く人たちに講話する。
 - * 私たちは、その食卓での講話を立ち聞きする特権に与ろうとしている。
 - * いつものように、ルールに従ってイエスのことばを解釈する必要がある。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 114 パリサイ派のある指導者の家で、安息日に癒しを行うイエス

2. アウトライン

- (1) 安息日に関する教え (1~6 節)
- (2) 招かれた客への教え (7~11 節)
- (3) 招いた主人への教え (12~14 節)
- (4) 自信がある人への教え (15~24 節)

3. 結論 :

- (1) 謙遜の究極的な意義
- (2) 謙遜が報われるタイミング

後の者が先になった経緯について、学ぶ。

I. 安息日に関する教え (1~6 節)

1. 1~2 節

Luk 14:1 ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家に入られたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。

Luk 14:2 そこには、イエスの真っ正面に、水腫をわずらっている人がいた。

- (1) ユダヤ人にとっての食事は、親しい交わりの機会である。
 - ①食事をともにする者同士の間、欺きや裏切りがあるのは忌むべきことである。
 - ②安息日の食事の場合は、なおさらそうである。
 - *高名なラビを招き、講話をしてもらう。
 - ③ここでは、その忌むべきことが、起こっている。

- (2) イエスは、パリサイ派のある指導者の家に招かれた。
 - ①主人は、パリサイ派の頭である。
 - ②パリサイ人たちは、これまで以上に真剣にイエスを罠にかけようとしている。

- (3) イエスの真っ正面に、水腫をわずらっている人がいた。
 - ①「水腫」とは、身体の組織液が異常に多量にたまった状態を指す。
 - ②水腫の人は、招待客である。
 - *彼は、部屋の隅にいた傍観者ではない。
 - ③水腫の人をそこに置いたのは、イエスを捕らえるための罠である。

2. 3～4節

Luk 14:3 イエスは、律法の専門家、パリサイ人たちに、「安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか」と言われた。

Luk 14:4 しかし、彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いていやし、帰された。

- (1) イエスは直ちに質問した。
 - ①イエスは、彼らの心の内を知っていた。
 - ②「安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか」
 - ③彼らは、命の危険がない限り、安息日に人を癒すのはよくないと教えていた。

- (2) 律法学者やパリサイ人たちは、沈黙していた。
 - ①彼らの心の中にあつた答えは、「よくないことだ」であった。
 - ②しかし、それを論証する理屈が見つからないので、黙っていた。
 - ③ラビ的議論では、沈黙は「敗北」か、「無知」を意味している。
 - ④そこでイエスは、その人を抱いていやし、帰された。

3. 5～6節

Luk 14:5 それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者があなたがたのうちにいるでしょうか。」

Luk 14:6 彼らは答えることができなかった。

(1) エッセネ派の人たちは、安息日に家畜を救うことを禁じた。

- ①しかし、パリサイ人たちはそれを許可した。
- ②家畜を助けることは、金銭の問題と関わっている。

(2) イエスは、ラビ的議論を2段階で展開している。

- ①パリサイ人たちが同意する点を確認する。
 - *彼らは、安息日に家畜を救うことを許可していた。
- ②「大から小への議論」(カル・バホメル)
 - *家畜を助けるなら、なおさらのこと、人間を助けるはずである。

(3) 彼らは、沈黙した。

- ①答えることはできなかったが、怒りにさらに火が付いたことであろう。
- ②自分たちの偽善が明るみに出されたから。

(4) その人は、儀式的な汚れのある人であった。

- ①イエスは、誰が神の国に入るかという議論への道備えをしておられた。
- ②儀式的な汚れのある人は、神の国に入れないと考えられていた。

II. 招かれた客への教え (7~11節)

1. 7節

Luk 14:7 招かれた人々が上座を選んでいる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。

- (1) 招かれた客たちが、われ先にと上座を選んでいった。
 - ①主人に近い席ほど、上座(榮譽ある席)である。

(2) このたとえは、イエスが説いてきた神の国のメッセージと関連性がある。

2. 8~10節

Luk 14:8 「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、

Luk 14:9 あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』とあなたに言

うなら、そのときあなたは恥をかいて、末席に着かなければならないでしょう。

Luk 14:10 招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すことになります。

- (1) 婚礼の披露宴では、自分から上座に座ってはならない。
 - ①身分の高い人が招かれているかもしれない。
 - ②「この人に席を譲ってください」と言われ、恥をかいて末席に行くことになる。

- (2) 最初から末席に着きなさい。
 - ①恐らく主人が来て、「どうぞもっと上席にお進みください」と言う。
 - ②そのときは、万座の中で面目を施すことになる。

3. 11節

Luk 14:11 **なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」**

- (1) これが、このたとえの結論である。
 - ①箴 25 : 6~7 の引用
「王の前で横柄ぶってはならない。偉い人のいる所に立ってはならない。高貴な人前で下に下げられるよりは、『ここに上って来なさい』と言われるほうがよいからだ」

- (2) 前回のテーマの続き
「いいですか、今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです」(ルカ 13 : 30)

Ⅲ. 招いた主人への教え (12~14節)

1. 12節

Luk 14:12 また、イエスは、自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。でないと、今度は彼らがあなたを招いて、お返しすることになるからです。

- (1) イエスは、招待客だけでなく、主人の振る舞いも観察していた。
 - ①その町の有名人、有力者、家族、親戚などを招いていた。
 - ②お返しをする力がある人たちを招いても、それは義なる行為ではない。

2. 13～14節

Luk 14:13 祝宴を催す場合には、むしろ、貧しい者、からだの不自由な者、足のなえた者、盲人たちを招きなさい。

Luk 14:14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。」

(1) お返しができない人たちを招くのが、義なる行為である。

①貧しい者、からだの不自由な者、足のなえた者、盲人たち

(2) この行為によって義とされるのではなく、信仰によって義とされる。

①行為は、義とされていることの証拠である。

②その人は、義人の復活に与る。

③そのときにお返しを受ける。

④それゆえ、自分に都合のよい人だけを招くのはよくないことである。

IV. 自信がある人への教え (15～24節)

1. 15節

Luk 14:15 イエスといっしょに食卓に着いていた客のひとはこれを聞いて、イエスに、「神の国で食事する人は、何と幸いなことでしょう」と言った。

(1) この人は、食卓に着いている客の全員が神の国で食卓に着くと思込んでいる。

①そこでイエスは、そこにいる人の多くが、神の国の食卓に着かないと教える。

②そればかりか、思いがけない人たちが、神の国の食卓に着くと教える。

* 罪人、取税人、遊女、汚れた者など、社会から見放された者たち

* 異邦人たち

2. 16～17節

Luk 14:16 するとイエスはこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大ぜいの人を招いた。

Luk 14:17 宴会の時刻になったのでしもべをやり、招いておいた人々に、『さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから』と言わせた。

(1) 宴会を催し、大ぜいの人を招くのは、神である。

①神の国が宴会にたとえられている。

(2) 時が満ちた時、主人はしもべを遣わし、招いておいた人々に声をかけた。

①しもべは、バプテスマのヨハネである。

②招いておいた人々は、イスラエルの霊的指導者たちである。

③ところが彼らは、その招きを断った。

3. 18～20 節

Luk 14:18 ところが、みな同じように断り始めた。最初の人是这样言った。『畑を買ったので、どうしても見に出かけなければなりません。すみませんが、お断りさせていただきます。』

Luk 14:19 もうひとり是这样言った。『五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです。すみませんが、お断りさせていただきます。』

Luk 14:20 また、別の人は这样言った。『結婚したので、行くことができません。』

(1) 畑を買ったので、見に出かける。

①宴会を準備した主人に対して、実に失礼な言い訳である。

(2) 5くびきの牛を買ったので、ためしに行く。

①金持ちなので、しもべがいたはずである。

(3) 結婚したので、忙しい。

①兵役なら、1年間免除される。

②宴会があることは、早くから知っていたはずである。

4. 21～22 節

Luk 14:21 しもべは帰って、このことを主人に報告した。すると、おこった主人は、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい者や、からだの不自由な者や、盲人や、足のなえた者たちをここに連れて来なさい。』

Luk 14:22 しもべは言った。『ご主人さま。仰せのとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』

(1) 主人は怒って、別の人たちを招くことにした。

①「貧しい者や、からだの不自由な者や、盲人や、足のなえた者たち」

②これは、一般庶民のことである。

③確かに、個人的にイエスを信じる一般のユダヤ人たちが起こされた。

(2) しかし、まだ空席があった。

4. 23～24 節

Luk 14:23 主人は言った。『街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい。』

Luk 14:24 言うておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひと

りもないのです。』

(1) 「街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい」

- ①これは、招待を受け入れる異邦人たちである。
- ②「無理にでも」とは、征服する力ではなく、説得する力である。

(2) 招待されていた人たちは、神の国に入れない。

- ①イエスはこの人たちを、「悪い時代(世代)」と呼んでいた。
- ②イエスがメシアであることを否定した人たちである。

(3) このたとえは、「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる」というモチーフと関係したものである。

結論

1. 謙遜の究極的な意義

「なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです」(ルカ14:11)

(1) イエスは、旧約聖書で教えられている霊的原則に言及している。

- ①特に、終末論的原則である。
- ②「【主】の日」(裁きの日)に適用される原則である。

(2) イザヤの預言

「まことに、万軍の【主】の日は、すべておごり高ぶる者、すべて誇る者に襲いかかり、これを低くする」(イザ2:12)

(3) エゼキエルの預言

「このとき、野のすべての木は、【主】であるわたしが、高い木を低くし、低い木を高くし、緑の木を枯らし、枯れ木に芽を出させることを知るようになる。【主】である

高

わ

わたしが語り、わたしが行う」(エゼ17:24)

「神である主はこう仰せられる。かぶり物は脱がされ、冠は取り去られる。すべてがすっかり変わり、低い者は高くされ、高い者は低くされる」(エゼ21:26)

(4) マリアは、メシアの働きの中に、その霊的原則の成就を見た。

「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました」(ルカ1:51~53)

(5) 神の招きは、異邦人にも与えられた。

①異邦人の中の多くの人が、その招きを拒否する。

②その理由は、高ぶりであり、自己充足である。

*私は、自分で生きていける。

*私は、たくさんの仕事を抱えている。

*私は、私生活で多忙にしている。

*私には、別の信条や信仰がある。

*これらの言い訳は、御子を犠牲にしてくださった神に対して失礼である。

③救われる人とは、自らを低くする人である。

「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです」(ルカ5:31~32)

2. 謙遜が報われるタイミング

「その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです」(ルカ14:14)

(1) 「義人の復活」はいつ起こるのか。

①携挙の時

*死者は墓の中から復活し、天に上げられる。

*生きている人は、そのまま栄光の体に変えられ、天に上げられる。

②大患難時代の終わりの時

*旧約聖書の聖徒たちが復活する。

(2) 謙遜は、クリスチャンの資質である。

(例話) エレベーターで一番下まで降りれば、後は上に行くしかない。

(3) キリストは、クリスチャンの手本である。

「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字

架の死にまでも従われました」（ピリ 2：5～8）

「弟子となるために」

ルカ 14 : 25～35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスは、エルサレムからペレアに移動する。
- ②次に、ペレアからエルサレム(ベタニヤ)に向かう。
- ③その途上で、「後の者が先になる」というメッセージがなされた。
- ④次に、パリサイ人の家での食卓の場面が出て来た。
 - * 「後の者が先になる」というテーマが継続して取り上げられた。
- ⑤今回は、「弟子道」に関する教えである。
 - * 十字架の時が迫っている。
 - * 弟子としての心構えをしっかりと教える必要がある。
 - * 3つの教えが出て来るが、これらの教えは、救いに関するものではない。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 115 大ぜいの群衆への警告のことば

2. アウトライン

- (1) 優先順位を明確にする(25～27節)。
- (2) 十字架を負う決心をする(28～30節)。
- (3) 犠牲を計算する(31～35節)。

3. 結論:

- (1) 塩とは何か。
- (2) イエスとは誰か。
- (3) 救われるだけではだめなのか。

イエスが教える弟子道について学ぶ。

I. 優先順位を明確にする(25～26節)。

1. 25節

Luk 14:25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。

- (1) ほとんどのリーダーは、フォロワーの数が増えることを喜ぶ。

(例話) ツイッターのフォロワー数 (2014年11月11日)

- ①有吉弘之 359万人
- ②きゃりーぱみゅぱみゅ 250万人
- ③ROLA 227万人
- ④孫正義 223万人

(2) イエスは、単にフォロワーが多いだけでは喜ばない。

- ①イエスは、群衆の方を振り向いた。これは、劇的な動作である。
- ②興味本位で従ってくる人たちに警告を発する。

(3) きょうの箇所は、イエスによるふるい分けの作業である。

- ①弟子の条件を提示することによって、本物の弟子を選別する。

2. 26節

Luk 14:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。」

(1) 「愛する」と「憎む」について

- ①通常は、感情的要素が深く関わっている。
- ②聖書の中では、「愛する」と「憎む」は、別の意味でも使用されている。
- ③「愛する」とは、選ぶことである。
- ④「憎む」とは、選ばないことである。

(例話) どの洋服を着るか。感情的要素は、入り込んでいない。

(2) 別の例は、神がエサウではなくヤコブを選んだことである。

「このことだけでなく、私たちの父イサクひとりによってみごもったリベカのこともあります。その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行わないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いにはよらず、召してくださる方によるようにと、『兄は弟に仕える』と彼女に告げられたのです。『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ』と書いてあるとおりです」(ロマ9:10~13)

(3) イエスは、何を優先するかという意味で、「愛する」と「憎む」を使っている。

- ①両親を憎めという教えがイエスのものでないことは明らかである。
- ②十戒の第5戒は、両親を敬うことを教えている。

(例話) 現代の反宣教団体の論法

*彼らは、イエスは両親を憎むように教えていると中傷する。

(4) イエスは、優先順位のことを言っている。

- ①イエスの弟子は、イエスに従うことへの妨害が出てきたら、それを拒否する。
- ②どんなに大切なものであっても、イエスよりも優先させてはならない。
- ③個人的な快適さよりも、イエスの栄光が現れることを求める。
- ④弟子は、二人の主人に仕えることができない。

II. 十字架を負う決心をする (27 節)。

1. 27 節

Luk 14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

(1) ローマ時代の十字架刑

- ①罪人は、十字架の横木を負って、刑場まで歩かされた。
- ②彼らは、ローマの権威によって強制的にそうさせられた。

(2) キリストの弟子は、自発的に十字架を負う。

- ①クリスチャンの中には、個人的な快適さを求めて、そうしない人たちがいる。
- ②弟子になろうと思う人は、自発的にそうする。

(3) 十字架を負うという意味

- ①キリストが歩まれたように歩むこと。
- ②自己否定、辱め、迫害、誘惑などなど。

III. 犠牲を計算する (28～35 節)。

1. 28～30 節

Luk 14:28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。

Luk 14:29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、

Luk 14:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった』と言うでしょう。

(1) これは、塔の建設のたとえ話である。

- ①紀元27年に、手抜き工事をした円形劇場が崩れ、約5万人の犠牲者が出た。
- ②手抜き工事の建物や、未完成の建物は、当時よく知られていた。

(2) 十分な資金がないままで塔を築こうとした人の物語

- ①塔については、シロアムの塔が倒れた話、畑に建てる見張りの塔、などがある。
- ②このたとえ話の結論は、施主が恥を見ることである。

*中東文化では、名誉が重視される。

2. 31～33 節

Luk 14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。

Luk 14:32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めるでしょう。

Luk 14:33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

(1) ヘロデ・アンティパスの敗戦

- ①ヘロデヤとの結婚のために、前妻と離婚した。
- ②前妻は、アラビアのアレタ王の娘であった(2コリ 11:32にその名が登場)。
- ③アレタ王は、ヘロデの姦淫が原因で娘が離縁されることに立腹した。
- ④アラビア戦争が勃発し、ヘロデは大敗した。
- ⑤これが、ヘロデ・アンティパスが没落するきっかけとなった。
- ⑥イエスのたとえ話を聞く聴衆には、その記憶が鮮明に残っていた。

(2) 戦争を始める前に、しっかりと考える必要がある。

- ①勝つ見込みがあるかどうかを吟味することは、死活問題である。
- ②弟子になるためには、その犠牲をしっかりと計算する必要がある。

(3) 2つのたとえ話は、弟子としての犠牲を数えることの重要性を教えている。

- ①中途半端な態度では、弟子になることはできない。

4. 34～35 節

Luk 14:34 ですから、塩は良いものですが、もしその塩が塩けをなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。

Luk 14:35 土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられてしまいます。聞く耳のある人は聞きなさい。」

(1) 塩気を失くした塩は、なんの役にも立たない。

- ①現代の塩は精製塩なので、塩気を失くすことはない。

- ②この当時の塩は、不純物が混じっている。
- ③塩分が溶け出して、不純物だけ残ることがある。
- ④その不純物は、耕作地の土壌にも、肥料にもならない。
- ⑤外に投げられる。

結論

1. 塩とは何か。

(1) 塩とは、弟子のことである。

①弟子が持つ性質は、塩の性質と同じである。

(2) 塩の契約

「イスラエルの神、【主】が、イスラエルの王国をとしえにダビデに与えられたこと、すなわち、塩の契約をもって、彼とその子らとに与えられたことは、あなたがたが知らないはずはあるまい」(2歴13:5)

①塩は、生きるための必需品である。中東の暑い気候では、なおさらそう言える。

②塩は、腐敗防止効果を持っている。

③塩は、調味料である。

④「塩の契約」という言葉は、永遠に変わらない契約を指す。

⑤同盟契約を結んだ者同士は、契約の食事をした。

⑥その際、塩味のきいた料理が用意された。

(3) 犠牲を計算し、全面的に献身する弟子は、キリストにとっては「塩」である。

①塩気を失くした弟子は、人々から物笑いにされる。

2. イエスとは誰か。

(1) シェマと呼ばれる聖句

「聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい」(申6:4~5)

①これは、ユダヤ教の基本的な信仰告白である。

②異教徒たちは、神々を礼拝していても、安心できなかった。

*気まぐれの神々で、次の行動は予測不可能である。

③イスラエルの民が信じる神は、契約の神である。

*それゆえ安心できる。

(2) イエスが弟子に要求されるのは、シェマの内容と同じである。

①イエスは、神である。

3. 救われるだけではだめなのか。

(1) 救いの道と弟子道を区別する必要がある。

(2) 救いは、恵みにより、信仰による。

①福音の三要素を受け入れ、イエスの信頼を置く。

②信仰とは「信頼」のことであって、救われるための条件ではない。

③一度救われたなら、救いを失うことはない。

* 塩気を失くした塩を外に投げるのは、人である(動詞が複数形)。

* 「men throw it away」(RSV)

(3) 弟子道は、自発的なものである。

①イエスは、すべての人を招かれる。

②イエスは、信じた人を「ふるい」にかけられる。

③イエスは、すべての人が弟子になることを願っておられる。

④しかし、すべての人が弟子としての道を選ぶわけではない。

⑤神の業は、弟子たちによって進められてきたし、これからもそうである。

(4) モーセの例

「信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました」

(ヘブ11:24~25)

(5) パウロの例

「もし私たちが気が狂っているとすれば、それはただ神のためであり、もし正気であるとするならば、それはただあなたがたのためです。というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです」(2コリ5:13)

「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています」(ピリ3:7~8)

「3つのたとえ話(1)」

ルカ 15 : 1~10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架の時が迫っている。
- ②「誰が神の国に入れるのか」というテーマが展開された。
- ③「後の者が先になり、先の者が後になる」という教えがあった。
 - *パリサイ人や律法学者よりも、取税人や遊女の方が先になる。
 - *ユダヤ人よりも、異邦人の方が先になる。
- ④3つのたとえ話は、恐らく最も有名なたとえ話であろう。
- ⑤「後の者が先になり、先の者が後になる」というテーマの延長線にある。
- ⑥今回は、最初の2つのたとえ話を取り上げる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 116 イエスは、3つのたとえ話によってパリサイ人と律法学者に反論する。

2. アウトライン

- (1) 場面設定 (1~2 節)
- (2) いなくなった羊 (3~7 節)
- (3) なくした銀貨 (8~10 節)
- (4) いなくなった息子 (11~32 節)
- (今回は、最初の2つのたとえ話を取り上げる)

3. 結論 : 3つのたとえ話と聖書の神

3つのたとえ話の意味について学ぶ。

I. 場面設定 (1~2 節)

Luk 15:1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。

Luk 15:2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」

1. イエスの態度

- (1) 取税人、罪人を受け入れた。

- ①罪人とは、遊女のことである。
- ②取税人も罪人も、イエスに魅かれた。

2. パリサイ人と律法学者たちは、イエスを非難した。

(1) もしイエスがメシアであるなら、取税人や遊女とは交際しないはずである。

①彼らは、口伝律法に固執していた。

(2) 口伝律法は、取税人や遊女と交際することを禁じた。

①パリサイ人たちは、取税人との売買取引を禁じられた。

②パリサイ人たちは、取税人の食卓に着くことを禁じられた。

* 什一をしていない可能性がある。

③パリサイ人たちは、取税人を食卓に招くことを禁じられた。

④パリサイ人たちは、罪人の前で清めの律法について論じることを禁じられた。

* 罪人が清められることを望まなかったからである。

⑤パリサイ人たちは、罪人にとって良き手本となることを禁じられた。

* 罪人が悔い改めて救われることがないためである。

⑥パリサイ人たちは、神は罪人の死を喜ばれると考えていた。

(2) イエスは、山上の垂訓で、口伝律法の誤りを正した。

①ここでは、3つのたとえ話を用いて、口伝律法の誤りを正す。

②イエスは、神が罪人に対してどのような姿勢を取るかを、教えている。

③取税人や遊女と、パリサイ人や律法学者の対比が語られる。

II. いなくなった羊 (3~7節)

Luk 15:3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。

Luk 15:4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を／野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。

Luk 15:5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、

Luk 15:6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。

Luk 15:7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。

1. たとえ話の意味

- (1) 羊飼いは、イエスを指している。
 - ①パリサイ人たちは、羊飼いを見下していた。
 - ②イエスは、パリサイ人たちが最初から拒否するであろう形でこのたとえ話を語っている。

- (2) いなくなった1匹は、悔い改めた罪人を指している。
 - ①100匹というのは、羊飼いがひとりで導く平均的な数である。
 - ②その中の1匹が失われた。
 - ③残された99匹は、パリサイ人たちを指している。
 - *彼らは、「囲いの中」ではなく、「野原(荒野)」に残された。
 - *彼らは、自分たちは悔い改める必要がないと思っている人たちである。
 - ④羊飼いは、どこまでも羊を探す。

- (3) 羊飼いの肩に担がれる羊は、救われた者の特権を指している。
 - ①悔い改めた(イエスを受け入れた)罪人は、イエスと親密な関係に入る。
 - ②羊飼いは、友人や隣人を集めてともに喜ぶ。

2. たとえ話の適用

- (1) 神の喜びとは何か。
 - ①「天」とは、神のことである。
 - ②ひとりの罪人が救われること。
 - *99匹はどうでもよいということではない。
 - ③「悔い改める必要のない99人」とは、パリサイ人たちである。
 - *彼らは、自分たちは悔い改める必要がないと思っていた。
 - ④業によって救いを得ようとする人よりも、信仰をもって近づく人を喜ばれる。

- (2) 神の友とは誰か。
 - ①いなくなった羊の回復を喜ぶ人である。
 - ②パリサイ人たちは、神の友とは言えない。

Ⅲ. なくした銀貨(8~10節)

Luk 15:8 また、女の人が銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか。

Luk 15:9 見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、『なくした銀貨を見つけました

から、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。

Luk 15:10 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」

1. たとえ話の意味

(1) 主人公は、女の人である。

①パリサイ人たちは、女性の価値を認めていなかった。

②イエスは、パリサイ人たちが最初から拒否するであろう形でこのたとえ話を語っている。

③彼女は、銀貨10枚を持っている。

*ドラクマ(ギリシアのコイン)

*1デナリと同じで、労働者1日分の価値がある。

④これは、恐らく花嫁料(ケトゥバア)であろう。

*結婚に際して、花嫁は花婿、または父親からこれを受け取った。

*当時のパレスチナでは、10枚であった。

*これは、離婚しても彼女が所有権を主張できる金である。

*10枚には、結婚指輪と同様の象徴的価値があった。

*1枚を失くすことには、金額的な損失以上の精神的損失があった。

(2) なくした銀貨は、悔い改めた罪人を指している。

①貧しい家の床には裂け目や凹凸があった。

②すぐには見つからない。

*考古学者は、床から発見されたコインで、その家の年代を推定する。

(3) 彼女は、念入りに探す。

①あかりをつける。

*手で持つランプである。窓から差す光よりも明るい。

②ほうきで掃く。

*コインがあれば、音がする。

③見つけるまで探す。

(4) 彼女は、友人や近所の女たちを招いてともに喜ぶ。

①ユダヤ教の伝承では、天使たちは地上における神の業に関心を抱いている。

②天使たちは、罪人の救いを喜ぶ。

2. たとえ話の適用

- (1) 神の喜びとは何か。
- ①ひとりの罪人の救いを喜ばれる。
 - ②9枚の銀貨は、パリサイ人たちを指している。
 - ③彼らは、自分たちは悔い改める必要のない者であると考えていた。
- (2) 神の友とは誰か。
- ①女とともに、銀貨を見つけ出したことを喜ぶ人たち。
 - ②パリサイ人たちは、神の友ではない。

結論：3つのたとえ話と聖書の神

1. なくなったものの価値が後になるほど増していく。
 - ①100分の1
 - ②10分の1
 - ③2分の1

2. 三位一体の神が関与している。
 - (1) いなくなった1匹を探し歩く羊飼いは、イエスを指している。
 - ①イエスの生涯を思い出せ。
 - *①誕生、公生涯、拒絶。十字架の死と復活
 - ②ラビの中には、罪人が神のもとに来るなら神は許してくださると教える者もいた。
 - ③神が捜し歩くという教えは、イエスに独特のものである。

 - (2) なくなった銀貨を捜す女の方は、聖霊を指している。
 - ①みことばの光を掲げて、捜す。
 - ②部屋の中に落ちていることは、分かっている。
 - ③アダムとエバが木の間に身を隠していることは分かっていた。
 - ④ザアカイがいちじく桑の木の葉の間に身を隠していることは分かっていた。

 - (3) 放蕩息子の父は、父なる神を指している。
 - ①あるべき姿に戻れ。
 - ②神は、私たちを喜び、誇りとしたいと思っておられる。

「3つのたとえ話(2)」

ルカ 15 : 11~32

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①十字架の時が迫っている。
- ②「誰が神の国に入れるのか」というテーマが展開された。
- ③「後の者が先になり、先の者が後になる」という教えがあった。
- ④3つのたとえ話は、恐らく最も有名なたとえ話であろう。
- ⑤「後の者が先になり、先の者が後になる」というテーマの延長線にある。
- ⑥今回は、最後のたとえ話を取り上げる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 116 イエスは、3つのたとえ話によってパリサイ人と律法学者に反論する。

2. アウトライン

- (1) 起：父親とふたりの息子 (11 節)
- (2) 承：弟の物語 (12~20 節 a)
- (3) 転：父の物語 (20b~24 節)
- (4) 結：兄の物語 (25~32 節)

3. 結論

- (1) 2種類の人々
- (2) 3つの祝福

3つのたとえ話の意味について学ぶ。

I. 起：父親とふたりの息子 (11 節)

1. 11 節

Luk 15:11 またこう話された。／「ある人に息子がふたりあった。」

(1) 3つのたとえ話に共通した動詞は、エコウ(持つ)である。

「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、」(4 節)

「また、女の人が銀貨を十枚持っていて、」(8 節)

「ある人に息子がふたりあった」(11 節)

「A certain man had two sons.」(KJV)

- ①日本語訳よりも英語訳の方が、原文の意味がよく表現されている。

(2) 3つのたとえ話では、すべて主人公がなにか大切なものを持っている。

①所有者は、自己犠牲の精神でそれを守る。

(3) このたとえ話の中心テーマ

①放蕩息子の立ち帰りではない。それは感動的な話ではある。

②父なる神の愛でもない。それもまた感動的な話ではある。

③ふたりの息子の対比が、中心テーマである。

II. 承：弟の物語(12～20節 a)

1. 12～13節

Luk 15:12 弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。

Luk 15:13 それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。

(1) 通常の遺産相続

①父が年老いて、財産の管理運用ができなくなった時点で、遺産を分割する。

②兄は、弟の2倍の分を相続した。

(2) 弟の要求は、通常考えられないものである。

①親を敬うことが賞賛されたユダヤ人社会では、なおさら異常なことである。

②「お父さん。早く死んでくれ」と言っているのと同じである。

(3) このような場合、父は息子を厳しく処罰することができた。

「かたくなで、逆らう子がおおり、父の言うことも、母の言うことも聞かず、父母に懲らしめられても、父母に従わないときは、その父と母は、彼を捕らえ、町の門にいる町の長老たちのところへその子を連れて行き、町の長老たちに、『私たちのこの息子は、かたくなで、逆らいます。私たちの言うことを聞きません。放蕩して、大酒飲みです』と言いなさい。町の人々はみな、彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならない。あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。イスラエルがみな、聞いて恐れるために」(申 21:21)

(3) しかし父は、弟の要求を呑んだ。

①弟は財産の3分の1、兄は財産の3分の2を得た。

②父が死ぬまでは、土地を売ることはできない。

*父が生きている間は、土地の収穫は父のものとなった。

*しかし弟は、それには構わず、土地を売って旅立った。

③聴衆のパリサイ人や律法学者たちは、最初からこの父親を軽蔑した。

*羊飼、女、そして、軟弱な父親と続く。

(4) 弟は、遠い国に旅立った。

①年齢は、18歳以下であろう(独身であった)。

②「遠い国」とは、物理的距離ではなく、宗教的、文化的距離である。

③デカポリスの中のひとつであろう。

(5) 放蕩して財産を使い果たした。

①「湯水のように」とは、意識である。

②人生経験がないために、財産の管理ができない。

③後に兄が言うように、「遊女におぼれた」のであろう(30節)。

(6) この段階で、聴衆はこのたとえ話のポイントを理解したはずである。

①イエスは、罪人と交わっているという理由で非難された。

②罪人とは、神から遠く離れ、墮落した生活で人生を浪費している人たちである。

③弟とは対照的に、兄は父のもとに留まり、墮落した生活から身を守った。

2. 14～16節

Luk 15:14 何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。

Luk 15:15 それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつ、豚の世話をさせた。

Luk 15:16 彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。

(1) 大ききん

①弟は、何もかも使い果たした。

②大ききんが起こった。古代世界では、よくある自然現象であった。

③大ききんは、「a blessing in disguise」である。

*変装して近づいてくる祝福

(2) 放蕩生活の結末

①彼は、生き延びるために、異邦人のもとに身を寄せた。

*豚を飼っているので、異邦人だと分かる。

*ガリラヤ湖の東岸の地では、豚が飼育されていた。

②豚飼いは、ユダヤ人にとっては最悪の職業である。

③彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであった。

*不当に低い賃金しかもらっていなかった。

*豚をうらやましいと思った。

(3) 聴衆は、これでたとえ話が終わると予測したはずである。

①罪人は、当然の報いを受ける。

②弟は、ユダヤ社会から切り離され、どんな援助も受ける資格を失った。

3. 17～20節 a

Luk 15:17 しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。

Luk 15:18 立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。

Luk 15:19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』

Luk 15:20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。

(1) 最悪の状態で、目が覚めた。

①父の家と自分の状態の対比

②父の家には、雇い人が大ぜいいる。

* 借り物の奴隷か、自由意志の奴隷である。

* 裕福な家を暗示している。

③自分は、飢え死にしそうだ。

(2) 彼は、雇い人のひとりにしてもらおうと考えた。

①息子として受け入れてもらうことは想定していない。

②父に告げる内容を、リハーサルしている。

* 「天」とは神のことである。

③聴衆は、弟の決断をとんでもない「思い上がり」と考えたであろう。

III. 転：父の物語 (20b～24節)

1. 20節 b

ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。

- (1) 父親は、息子の帰りを待っていた。
 - ①父親は、家から遠かったのに、息子を見つけた。
 - ②かわいそうに思った。

- (2) 走り寄って、彼を抱き、口づけした。
 - ①年長者の威厳を投げ捨てた。
 - ②口づけは、家族愛の表現である。

2. 21～24節

Luk 15:21 息子は言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』

Luk 15:22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。』

Luk 15:23 そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。

Luk 15:24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』／そして彼らは祝宴を始めた。

- (1) 父親は、息子の言葉を途中でさえぎり、彼を息子として迎えた。
 - ①着物、指輪、靴を与えた。

- (2) 宴会を開いた。
 - ①子牛1頭は、村中の人を招いても十分な量である。
 - *今日でもユダヤ人たちは、大宴会を開く。
 - *パール・ミツバ、結婚披露宴など。
 - ②宴会のテーマが再登場している。
 - *メシア的王国の象徴である。
 - *聴衆は、悔い改めた罪人が御国に入っている姿を想像することができた。
 - *弟は、悔い改めた罪人の象徴である。
 - *では、兄はどうなったのか。

- (3) 古代の作家がよく採用した文学手法がある。
 - ①クライマックスを最後まで隠しておくという手法である。
 - ②このたとえ話のここまでの展開は、前の2つのたとえ話と同じである。
 - ③最後に、クライマックスが来る。

IV. 結：兄の物語(25～32節)

1. 25～28節 a

Luk 15:25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。

Luk 15:26 それで、しもべのひとり呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、

Luk 15:27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』

Luk 15:28 すると、兄はおこって、家に入ろうとしなかった。

(1) 兄は、パリサイ人や律法学者たちの象徴である。

① 兄は、弟が宴会の席にいることを好まなかった。

② パリサイ人や律法学者たちは、罪人たちが御国に入るというメッセージを喜ばなかった。

③ 兄は、宴会の席に入ることを拒否した。

④ パリサイ人や律法学者たちは、イエスが提示した御国に入ることを拒否した。

2. 28b～30節

それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。

Luk 15:29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむと言って、子山羊一匹下さったことはありません。』

Luk 15:30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』

(1) 父親は家から出てきて、侮辱的な態度を取る兄をなだめた。

① イエスは、パリサイ人や律法学者たちとも食事をともにした。

② イエスは、すべての人を御国に招かれた。

(2) 兄の態度と自己認識

① 「父よ」と呼びかけないのは、軽蔑のしるしである。

② 自分は、長年奴隷のように働き、戒めを守った。

③なのに、宴会を開いてもらったことはない。

④ 兄は、弟の帰還によって何か失ったわけではない。

(3) 兄の誤解

- ①兄は、業によって父との関係を保てると思った。
- ②兄は、愛のゆえに父に仕えたのではない。
- ③兄は、自分のことを奴隷のように考えていた。

3. 31～32節

Luk 15:31 父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』

Luk 15:32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』

- (1) 兄には、家にいる喜びと、父の財産の所有権が与えられていた。
 - ①宗教的指導者たちは、選びの民として特権的地位を有していた。
 - ②彼らには、神の啓示のことばが委ねられていた。
- (2) 兄は、弟の帰還を喜ぶべきである。
 - ①「あなたの息子」
 - ②「おまえの弟」

結論：

1. 2種類の人々

- (1) 父親は、2人の息子を持っていた。
 - ①全人類は、すべて神の子である。
- (2) 2人の息子は、異なった地位を得た。
 - ①兄は血のつながりによる息子である。
 - ②弟は、悔い改めと回復による息子である。
- (3) 全人類は、2種類に分割される。
 - ①神による創造のゆえに、神の子である人たちがいる。
 - ②信仰と恵みによる贖いのゆえに、神の子である人たちがいる。
 - ③どうすれば、後者の意味での神の子になれるのか。

(4) 訳文の比較 (17節)

「しかし、我に返ったとき彼は、こう言った」(新改訳)

「そこで、彼は我に返って言った」(新共同訳)

「そこで彼は本心に立ちかえって言った、」(口語訳)

「こんな毎日を送るうち、彼もやっと目が覚めました」(リビングバイブル)

- ①彼は、遠い国にいた。
- ②彼は、神から遠く離れていた。
- ③彼は、本来の自分の姿に気づいた。

(5) 救いとは、本来の自分の姿に立ち返ることである。

- ①私は、神の「かたち」に創造されている。
- ②今の私は、本来の私の姿ではないと気づくことが救いの第一歩である。
- ③兄の反応は記されていない。

2. 3つの祝福(22節)

Luk 15:22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。』

(1) 一番よい着物

- ①一番よい着物は、父親の所有物である。
- ②長子の権利を意味する。
- ③ヨナタンは、ダビデが王位を継承すると認めた。

「ヨナタンは、着ていた上着を脱いで、それをダビデに与え、自分のよろいかぶと、さらに剣、弓、帯までも彼に与えた」(1サム18:4)

(2) 指輪

- ①権威の象徴
- ②パロはヨセフに権威を委譲した。

「そこで、パロは自分の指輪を手からはずして、それをヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、その首に金の首飾りを掛けた」(創41:42)

(3) くつ(サンダル)

- ①息子であることの象徴。奴隷はくつをはかない。
- ②亡くなった兄弟の家を興さない者への罰

「その兄弟のやもめになった妻は、長老たちの目の前で、彼に近寄り、彼の足からくつを脱がせ、彼の顔につばきして、彼に答えて言わなければならない。『兄弟の家を立てない男は、このようにされる』」(申25:9)

「不正な管理人のたとえ」

ルカ 16 : 1～13

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①「後の者が先になり、先の者が後になる」という教えがあった。
- ②失われた羊、失くした銀貨、いなくなった息子、という3つのたとえ話
- ③この箇所では、イエスは弟子たちに教えている。
- ④弟子訓練のためのたとえ話である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 117 管理人についての3つのたとえ話 (16 : 1～17 : 10)

- ①不正な管理人のたとえ (弟子たちに)
- ②パリサイ人たちとの対決
- ③金持ちとラザロの物語 (パリサイ人たちに)
- ④赦しと奉仕に関する教え (弟子たちに)

(3) 「不正な管理人のたとえ」は、極めて難解である。

- ①イエスが不正を奨励しているかのように読める。
- ②解釈の鍵は、「不正の富」という言葉にある。
- ③このたとえ話は、「悪事」を用いて「良いこと」を教えているのである。

2. アウトライン

- (1) 管理人の不正の発覚 (1～2 節)
- (2) 管理人の悪知恵 (3～7 節)
- (3) 主人の評価 (8 節)
- (4) イエスによる適用 (9～13 節)

3. 結論

- (1) 富に関する誤解
- (2) 富に関するバランスある理解
- (3) ふたりの主人

不正な管理人のたとえについて学ぶ。

I. 管理人の不正の発覚 (1~2節)

1. 1節 a

Luk 16:1 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。

- (1) イエスは、弟子たちに話している。
 - ①これは、弟子訓練のためのたとえ話である。
 - ②聴衆が誰かを判断することが、たとえ話の解釈のために重要である。
- (2) その周りで、パリサイ人たちも聞いている。
 - ①彼らは、イエスの教えをあざ笑う (14節)。

2. 1節 b~2節

「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。

Luk 16:2 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』

- (1) ある金持ちが、ひとりの管理人を雇っていた。
 - ①管理人とは、現代のファイナンシャルプランナーや管財人に相当する。
 - ②イエス時代、金持ちは資産運用のために管理人を雇うことが一般的だった。
 - *管理人は、奴隷の場合も、自由人の場合もあった。
 - ③資産は主人のものであり、管理人はその運用を任されているだけである。
- (2) この管理人は、主人の財産を乱費していた。
 - ①放蕩息子が父の遺産を浪費したのと似ている。
 - ②その噂が主人の耳に入った。

(3) 訳文の比較 (2節)

「おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい」(新改訳)

「お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない」(新共同訳)

「あなたについて聞いていることがあるが、あれはどうなのか。あなたの会計報告を出しなさい。もう家令をさせて置くわけにはいかないから」(口語訳)

「帳簿をごまかしているそうだな。もっばらのうわさだぞ。なんてことだ。こうなった以上、やめてもらおう。報告書を整理しておくんだな」(リビングバイブル)

(4) 最初主人は管理人のことを、不正直というよりも無責任と考えている。

①それゆえ、解雇する前に、管理人に帳簿を整理する時間を与えた。

II. 管理人の悪知恵 (3～7 節)

1. 3 節

Luk 16:3 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、物ごいをするのは恥ずかしいし。』

(1) 管理人の頭は急速に回転した。

①土掘りは、奴隷か、それ以外に能力のない者の仕事である。

②物ごいは、不名誉な職業である。

2. 4～6 節

Luk 16:4 ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』

Luk 16:5 そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言うと、

Luk 16:6 その人は、『油百バテ』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい』と言った。

(1) 主人の債務者たちとは、小作農であろう。

①主人に収穫量の中からある歩合を払うことになっている。

②収穫期までは、支払う必要はない。

③管理人は、負債を減らしてやれば将来自分を雇ってくれるだろうと考えた。

(2) 最初の者

①油 100 バテ → 50 バテ

②バテとは、「娘」。一人の少女が運べる水の量。

③1 バテは、約 8.5 ガロン (約 32 リットル)

④100 バテは、約 3,200 リットル

⑤オリーブの木 150 本分 (1000 デナリに相当する)

⑥この人は、現代の貨幣価値で約 500 万円免除された。

3. 7 節

Luk 16:7 それから、別の者に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、『小麦百コル』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい』と言った。

(1) 別の人

- ①小麦 100 コル → 80 コル
 - ②100 コルは、100 エーカーの収穫量 (2,500 デナリに相当する)
 - ③この人もまた、約500万円免除された。
 - ④免除された割合は異なるが、ほぼ同額が免除されたことになる。
- (2) 両者ともに、かなり裕福な人である。
- ①それゆえ、将来雇ってもらえる可能性がある。
- (3) この管理人には知恵がある。
- ①自分が手を染めるのではなく、負債者に修正させている。
*負債者に罪を犯させている。
 - ②書類上の変更なので、発覚の可能性がより低い。
 - ③当時、干ばつの時には負債を減額し、名声を得る人が多くいた。
 - ④もし主人が免除を取り消せば、面目を失くす可能性がある。
 - ⑤古代世界では、奴隷が主人を出し抜くという物語が流布していた。

III. 主人の評価 (8節)

1. 8節

Luk 16:8 この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。

- (1) 主人は、不正をほめたのではない。
- ①これは、悪い事を用いた良い教えである。
- (2) 未信者（この世の子ら）と信者（光の子ら）との対比がある。
- ①主人は、管理人が抜け目なくやったことをほめたのである。
 - ②この管理人は、物質を用いて、自分の将来の備えをしたのである。

IV. イエスによる適用 (9～13節)

1. 9節

Luk 16:9 そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。

- (1) 地上の富を、魂を勝ち取るために使用すべきである。
- ①「不正の富」(unrighteous mammon) とは、この世の富のことである。

*これは、ラビ用語である。

②「富がなくなったとき」(when you fail)とは、死んだ時という意味である。

*ギリシア語の「エクレイポウ」である。

③地上の富を用いて伝道したなら、天で迎えてくれる人が出る。

*富の使用によって天に入れるという意味ではない。

2. 10～12節

Luk 16:10 小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。

Luk 16:11 ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。

Luk 16:12 また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。

(1) 小さい事

①地上の富のことである。

②不正の富のことである。

③他人のもののことである(富は神のもの)。

(2) 大きい事

①永遠に価値あるもの(霊的財産)である。

②まことの富のことである。

③自分が所有できるもののことである(永遠の命は自分のもの)。

(3) 小さい事に忠実な人に、大きい事が委ねられる。

3. 13節

Luk 16:13 しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

(1) ふたりの主人に仕えることはできない。

①神に仕えるか。

②富(マモン)(アラム語)に仕えるか

結論：

1. 富に関する誤解

(1) パリサイ人たちの教え

①神は愛する人を富ませる。

②富は、神に愛されている証拠である。

(2) 今日の「繁栄の神学」も、同じ教理的過ちを犯している。

①信仰によって、健康、富、成功などが手に入るという教えである。

②人格の完成については、ほとんど取り上げない。

2. 富に関するバランスのある理解

(1) 地上の富を軽視するのは間違っている。

①光の子らは、この世の子ら以上に、富の管理についてたけている必要がある。

②神がすべて与えてくださると言って、無責任になるのはよくない。

(2) 地上の富を重視し過ぎるのも間違っている。

①富は、「まことの富」を得るために用いるべきである。

②「まことの富」とは、救いであり、主イエスとの関係である。

③御国の拡大のためにお金を使う人は、幸いである。

3. ふたりの主人

(1) 奴隷がふたりの主人を持てば、矛盾した命令が来て、働くことができなくなる。

(2) 光の子らはマモンに仕えるのではなく、マモンを利用して神に仕えるべきである。

(3) 1テモ6:9~10

「金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました」

(例話) アフリカから帰国した宣教師：出迎える人がいない。

「金持ちとラザロの物語」

ルカ 16 : 14~31

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、「不正な管理人のたとえ」を弟子たちに向けて語った。
- ② 地上の富を、魂の救いのために用いよという教え。
- ③ それを聞いて、パリサイ人たちがイエスをあざ笑った。
- ④ 富に関するパリサイ人たちの神学が、イエスのそれとは異なっていたから。
- ⑤ そこでイエスは、彼らの誤りを正すために「金持ちとラザロの物語」を語った。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 117 管理人についての3つのたとえ話 (16 : 1~17 : 10)

- ① 不正な管理人のたとえ (弟子たちに)
- ② パリサイ人たちとの対決
- ③ 金持ちとラザロの物語 (パリサイ人たちに)
- ④ 赦しと奉仕に関する教え (弟子たちに)

(3) 今回は、②と③を取り上げる。

2. アウトライン

- (1) パリサイ人たちとの対決 (14~18 節)
- (2) 金持ちとラザロの物語 (19~31 節)
 - ① 金持ちとラザロの対比
 - ② 死後の世界での金持ちとラザロの対比
 - ③ 越えられない大きな淵
 - ④ 神のことばへの信頼

3. 結論

- (1) 死ぬとどこへ行くのか。
- (2) 死後の魂の状態はどのようなものか。
- (3) セカンドチャンスの教えは聖書的か。

個人的終末論について考えてみる。

I. パリサイ人たちとの対決 (14~18 節)

1. 14~15 節

Luk 16:14 さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。

Luk 16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられるものは、神の前で憎まれ、きらわれます。

(1) きょうの箇所のポイントは、パリサイ派神学との対決である。

- ①パリサイ人たちは、金に執着していた。
- ②彼らは、イエスが教えたこと(不正な管理人のたとえ)に同意しなかった。
- ③彼らは、神に愛されている者は金持ちになると教えていた。
- ④イエスは貧しく、イエスに従っている者たちも貧しい。
- ⑤そのイエスが、富について教えているのは滑稽なことである。

(2) しかしイエスは、彼らの教えは人間的なもので、神に憎まれていると語った。

- ①金持ちであることは、その人が義人であるという証拠ではない。

2. 16~18 節

Luk 16:16 律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これに入ろうとしています。

Luk 16:17 しかし律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしいのです。

Luk 16:18 だれでも妻を離別してほかの女と結婚する者は、姦淫を犯す者であり、また、夫から離別された女と結婚する者も、姦淫を犯す者です。

(1) 「律法と預言者」とは、旧約聖書のことである。

- ①バプテスマのヨハネは、旧約時代における最後の預言者である。
- ②バプテスマのヨハネとイエスによって、神の国の福音が宣べ伝えられている。

(2) 「だれもかれも、無理にでも、これに入ろうとしている」

- ①民衆は、モーセの律法から逸脱したパリサイ派神学に束縛されていた。
- ②宗教的指導者たちは、民衆がイエスをメシアとして受け入れることを妨害した。
- ③民衆にとっては、イエスを信じることは、「戦い」であった。

(3) 「律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしい」

- ①パリサイ人たちは、モーセの律法を骨抜きにしていた。
- ②彼らにとっては、口伝律法の方が重要であった。

③しかしイエスは、モーセの律法はことごとく成就すると宣言された。

(4) 次に、離婚に関する教えが出て来る。

①パリサイ派の律法曲解の例として、離婚に関する教えが取り上げられている。

②詳細は、先に行ってから取り上げる。

II. 金持ちとラザロの物語 (19～31 節)

(例話) 高校時代の英語でのバイブルクラスの失敗談

1. 金持ちとラザロの対比 (19～21 節)

Luk 16:19 ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

Luk 16:20 ところが、その門前にラザロという全身おどきの貧しい人が寝ていて、

Luk 16:21 金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおどきをなめていた。

(1) 金持ち

①いつも紫の布や細布を着ていた。

*紫色の布は高価であった。細布は細い麻で織った布で下着に着る。

②毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

③パリサイ人たちの教えでは、彼は義人であるが、実態はそうではない。

④彼は、隣人愛に欠けている。これが、救われていない証拠である。

⑤彼は、金持ちだからではなく、信仰が欠如しているから救われていないのだ。

(2) ラザロ

①実名が出ているので、これは「たとえ話」ではなく「実話」である。

②全身おどきの貧しい人で、金持ちの門前で寝ていた。

③金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。

④犬もやって来ては、彼のおどきをなめていた。

⑤パリサイ人たちの教えでは、ラザロは罪人であるが、実態はそうではない。

⑥彼は義人であるが、それは貧しいからではなく、神に信頼したからである。

2. 死後の世界での金持ちとラザロの対比 (22～23 節)

Luk 16:22 さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。

Luk 16:23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかな

たに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。

(1) ラザロ

- ①死んでアブラハムのふところに連れて行かれた。
- ②死者の霊が行く場所は、シオール/ハデスである。
- ③シオール/ハデスは、2つに分かれている。
 - *義人の行く所は、「アブラハムのふところ」である。
 - *これは、パラダイスと同義である。
 - *罪人の行く所は、狭義の「ハデス」である。
- ④ラザロは、慰めの場所に連れて行かれた。
- ⑤この状態は、パリサイ派の教えとは正反対である。

(2) 金持ち

- ①死んでハデスに行った。狭義の「ハデス」である。
- ②彼は、ハデスで苦しんでいた。
- ③彼は、はるかかなたにアブラハムとラザロを見た。
- ④この状態は、パリサイ派の教えとは正反対である。

3. 越えられない大きな淵 (24~26 節)

Luk 16:24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』

Luk 16:25 アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生/きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。』

Luk 16:26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』

(1) 金持ちは、苦しみの中からアブラハムに向かって叫んだ。

- ①彼は、アブラハムの子孫である。
- ②パリサイ派の教えでは、アブラハムの子孫は自動的に神の国に入るはずである。
- ③彼は、ラザロをよこして、水一滴でも口に落としてほしいと願った。

(2) アブラハムは、大きな淵があるので、往き来は不可能であると答える。

- ①シオール/ハデスでは、両方の場所から互いを見ることはできる。
- ②しかし、大きな淵があるので、場所を移動することはできない。

4. 神のことばへの信頼 (27～31節)

Luk 16:27 彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。』

Luk 16:28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』

Luk 16:29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』

Luk 16:30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』

Luk 16:31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』

(1) 金持ちは、ラザロを父の家に送り、5人の兄弟たちに警告してほしいと願った。

①5人の兄弟たちが、自分と同じ苦しみに会わないように。

(2) アブラハムは、彼らには「モーセと預言者」があると答えた。

①旧約聖書のこと

②つまり、神のことばである。

(3) 金持ちは、復活したラザロが行けば、5人の兄弟たちは信じるはずだと主張する。

(4) アブラハムは、人間の性質を考えると、そうは行かないと答える。

①神のことばに耳を傾けないなら、どんな奇跡が起こっても信じるものではない。

②これは、イエスご自身の体験でもある。

結論：

はじめに

(1) これは、実話である。

(2) 日本人に対する適用が多く含まれる。

1. 死ぬとどこへ行くのか。

(1) シオール/ハデスに行く。

(2) そこは、アブラハムのふところ(パラダイス)とハデスに分かれている。

(3) イエス・キリストの昇天以降、パラダイスの部分は天に上げられた。

①新約時代の聖徒たちの魂は、天にあるパラダイスに行く。

(4) エペ4:8

「そこで、こう言われています。『高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた』」

2. 死後の魂の状態はどのようなものか。

(1) ある人たちは、復活するまで魂は眠りの状態にあると主張する。

(2) 1テサ4:13~14

「眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあつて眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずですよ」

①「眠った」とは、肉体的死を表現する比喩的言葉である。

②この聖句を根拠に、魂の眠りを主張することはできない。

(3) 金持ちは、意識があり、判断力がある。

(4) これは、クリスチャンにとっては大いなる希望である。

3. セカンドチャンスの教えは聖書的か。

(1) パリサイ派の神学の問題点は、神のことばを離れて口伝律法を作ったこと。

(2) 「金持ちとラザロの物語」の中で、聴衆が驚いた点は何か。

①貧乏人が、アブラハムのふところに行った。メガ・サプライズ(10の6乗)。

②金持ちが、ハデスに行った。ギガ・サプライズ(10の9乗)。

(3) セカンドチャンス信じる人は、テラ・サプライズ(10の12乗)を経験する。

(4) 人は、自分に与えられている啓示の量に応じて裁かれる。

①自然界

②良心

③神のことば

(5) セカンドチャンス論は、問題を解決するよりも新たな問題を作り出す。

①伝道の意欲がなくなる。

②伝道しない方がよいという極論に至る可能性がある。

「弟子の責務」

ルカ 17 : 1~10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①前回の箇所ではイエスは、パリサイ人たちの誤りを正すために「金持ちとラザロの物語」を語った。
- ②きょうの箇所では、再び弟子たちに向かって語りかけている。
- ③文脈の中でこの箇所を理解する必要がある。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 117 管理人についての3つのたとえ話 (16 : 1~17 : 10)

- ①不正な管理人のたとえ (弟子たちに)
- ②パリサイ人たちとの対決
- ③金持ちとラザロの物語 (パリサイ人たちに)
- ④赦しと奉仕に関する教え (弟子たちに)

(3) 今回は、④を取り上げる。

2. アウトライン

(1) 赦しに関する教え (隣人への責務) (1~4 節)

- ①つまずきを与えるな (1~2 節)。
- ②つまずくな (3~4 節)。

(2) 奉仕に関する教え (神への責務) (5~10 節)

- ①真の信仰を持つこと (5~6 節)。
- ②神に忠実に仕えること (7~10 節)。

3. 結論

- (1) 赦しに関するまとめ
- (2) 弟子の自己認識

クリスチャンの責務について考えてみる。

I. 赦しに関する教え (隣人への責務) (1~4 節)

- 1. つまずきを与えるな (1~2 節)。

Luk 17:1 イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、

つまずきを起こさせる者はわざわいだ。

Luk 17:2 この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであつたら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。

(1) 罪が支配する世にあつては、つまずきが起こることをなくすのは不可能である。

- ①「つまずき」は、ギリシア語で「skandalon」である。
- ②本来の意味は、獲物を捕獲する「罨」に付けられ木片である(餌を付けてある)。
- ③それが作動すると、「罨」が閉まり、獲物が捕獲される。
- ④この言葉は、罨にかかった獲物の行動も指す。
- ⑤ここでは、この言葉が比喩的に用いられている。
- ⑥他の人たちに罪を犯させること。
- ⑦他の人たちを、イエスから遠ざけること(信仰から遠ざけること)。

(2) しかし、つまずきを起こさせる者は、わざわいである。

①パリサイ人たちは、つまずきを与えていた。

「わざわいだ。律法の専門家たち。おまえたちは知識のかぎを持ち去り、自分も入らず、入ろうとする人々をも妨げたのです」(ルカ 11:52)

*律法主義というつまずきである。

②金持ちもまた、つまずきを与えていた。

*物質主義、拝金主義というつまずきである。

(3) イエスの弟子たちは、つまずきの原因となつてはならない。

- ①「小さい者たち」とは、第一義的には、霊的幼子たちであろう。
- ②彼らは、まだ信仰が成長していないので、悪影響を受けやすいのである。

(4) つまずきを与えることは、深刻な罪である。

- ①処罰も大きい。
- ②処罰に関して厳しい言葉が使われている。
(例話) カペナウムの遺跡に置かれている石臼
- ③婦人が手で回すものではなく、ロバに挽かせるような石臼
(例話) ロバート・シュラー博士の質問 「何を一番恐れるか」
- ④道徳的な罪、聖書の単純な意味を変更するような教え

2. つまづくな(3~4節)。

Luk 17:3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。

Luk 17:4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

(1) イエスの弟子は、自分自身に関しては、つまりはならない。

①罪に対しては、赦しをもって対処する。

②2段階の対処法

*罪を犯している人を戒める。

*悔い改めれば、赦す。

③7度の赦しは、完全な赦しを意味する。

II. 奉仕に関する教え(神への責務)(5~10節)

1. 神への第一の責務は、真の信仰を持つことである(5~6節)。

Luk 17:5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」

Luk 17:6 しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ』と言え、言いつけどおりになるのです。」

(1) 無限に赦すことは、極めて難しいことである。

①それで弟子たちが、「私たちの信仰を増してください」と願ったのである。

(2) イエスは、より大きな信仰ではなく、正しい信仰こそ大切であると教えた。

①それが、からし種ほどの信仰である。

②真の信仰には、桑の木をも動かすほどの力がある。

③桑の木とは、いちじく桑の木である。この木は、地中に根を広げる。

④ここでは、桑の木は私たちの内にあるプライド、自我を象徴している。

⑤赦しの心がないのは、プライドや自我の問題である。

⑥それを抜き取る力は、信仰から来る。

2. 神への第2の責務は、神に忠実に仕えることである(7~10節)。

Luk 17:7 ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい』としもべに言うでしょうか。

Luk 17:8 かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい』と言わないでしょうか。

Luk 17:9 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。

Luk 17:10 あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまった

ら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

(1) 忠実なしもべのたとえ話

①主人は、野らから帰って来た奴隷(自由意志による奴隷)を食卓に招かない。

*主人が奴隷と食卓に着くことはない。

②むしろ、食事の用意をさせる(少数の奴隷しかいない家)。

③その後で、奴隷は食事をする。

④主人は奴隷に感謝を表さない。

⑤イエスの弟子も、そのような心構えを持つべきである。

⑦「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです」と言う。

⑧訳文の比較

「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです」(新改訳)

「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」

(新共同訳)

「わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません」(口語訳)

(2) たとえ話の教訓

①信仰は、奉仕を通して成長する。

(例話) 奉仕→信仰が育つ→より大きな奉仕ができる→より信仰が育つ

結論

1. 赦しに関するまとめ

(1) 他の信者から傷つけられた場合、先ず心の中でその人を赦す。

「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい」(エペ4:32)

①赦しの心を持つことは、自分の魂を解放する道である。

(2) 次に、個人的にその人に悔い改めを迫る。

「もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい」(ルカ17:3)

①マタ18:15

(3) もし悔い改めないなら、ほかに一人か二人を連れていく。

①マタ18:16

(4) それでも効果がないなら、教会にそれを告げる。

①マタ18:17

②以上のことを、愛をもって実行する。目的は、交わりの回復である。

(5) ルカ 17:4

「かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい」

- ①「悔い改めます」という言葉が真実かどうかを吟味する必要はない。
- ②その言葉を信じて、その都度赦す。
- ③これは、天の父が私たちを扱ってくださる方法である。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(1ヨハ1:9)

2. 弟子の自己認識

(1) エペ 2:8~10

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです」

- ①救いも、行いも、すべて神の恵みによる。
- ②「取りに足りない僕」という自己認識こそ、信仰を育て、その人を自由にする。

(2) ロイ・ヘッション

*英国人(1908~1992)、「カルバリの道」の著者。

*「しもべの5つの特徴」

- ①数々の仕事の上にもう一つ仕事を乗せられても、自分に対する配慮がないと思わないで、それをそのまま受け入れる。
- ②その際、感謝されることを期待しない。
- ③その仕事を終えたとき、主人のことを、利己的な人だと責めない。
- ④「自分は取るに足りないしもべです」と告白しなければならない。
- ⑤柔和と謙遜への道において、自分はなにひとつ貢献していないと認めなければならない。

(3) 自己実現を求める道と、カルバリへの道とは大いに異なる。

(4) カルバリの道の先に待っているものはなにか。

「主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます」

(ルカ 12:36)

「ラザロの復活」(1)

ヨハ 11 : 1~27

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、ヨルダン川の東側、ペレアで活動している。
- ② ユダヤに行くのは、危険である。国の指導者たちが、イエスの命を狙っていた。
- ③ ベタニヤは、エルサレムの東数キロのところにある村である。
- ④ そこは、マルタ、マリア、ラザロが住んでいた村である。
- ⑤ イエスがいた場所から徒歩で約1日の距離である。
- ⑥ ベタニヤで、イエスは公生涯最後の大いなる奇跡を行われる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 118 イエスはラザロを死から甦らせる (ヨハ 11 : 1~44)

(3) 死からの復活

- ① イエスは、同様の奇跡を行っていた (厳密には蘇生)。
 - * マコ 5 : 41~42 会堂管理者の娘
「タリタ、クミ」
 - * ルカ 7 : 14~15 ナインのやもめのひとり息子
「青年よ。あなたに言う、起きなさい」
- ② それらの奇跡との違い
 - * 死んですぐの復活と、4日目の復活
 - * 数節と、44節
 - * 少数の目撃者と、多数の目撃者
- ③ ラザロの復活は、「ヨナのしるし」である。
 - * イエスのメシア性を証明する奇跡。公生涯で最大の奇跡と言ってもいい。
 - * 国の指導者たちは、信仰によって応答しなければならない。

2. アウトライン

- (1) イエスと弟子たち (1~16節)
- (2) イエスとマルタ (17~27節)
- (3) イエスとマリア (28~32節)
- (4) イエスとラザロ (33~44節)
- (今回は、(1) と (2) を取り上げる)

3. 結論

- (1) 聖書が教える死の意味
- (2) 光と闇の葛藤

死といのちについて考えてみる。

I. イエスと弟子たち (1~16 節)

1. 1~3 節

Joh 11:1 さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。

Joh 11:2 このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。

Joh 11:3 そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」

- (1) ヨハネは、マリアを中心にこの一家を紹介している。
 - ①「主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤ」と説明している。
 - ②イエスは、ベタニヤ村のこの一家を愛された。
 - ③取るに足りないこの村が、イエスを愛する者たちがいたので有名になった。
- (2) ラザロが重病になった。
 - ①ラザロの罪が問題だという指摘は、全くない。彼は義人である。
 - ②姉妹たちは、イエスのところに使いを送った。そこまでの距離は、1日である。
 - ③「あなたが愛しておられる者」というのが、イエスへの懇願のベースにある。
 - ④ところが、ラザロはその直後に亡くなったようである。

2. 4~6 節

Joh 11:4 イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」

Joh 11:5 イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

Joh 11:6 そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。

- (1) ラザロの病気は、死で終わるものではない。
 - ①この病気の最終結末は、肉体の死ではない。
 - ②ラザロは復活し、神の栄光が現れる。

③それによって、神の子は栄光を受ける。

(2) ここには、アイロニー(皮肉)がある。

①父なる神へのイエスの従順が示された。

②イエスはラザロにいのちを与えるが、そのことがイエスを十字架の死に導く。

③十字架の死は、イエスの栄光の現れである。

(3) イエスは、なおもその場所に2日とどまった。

①「わたしの時がまだ満ちていないからです」(ヨハ7:8)

②イエスは、父なる神のタイムテーブルに従って行動する。

3. 7～10節

Joh 11:7 その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。

Joh 11:8 弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」

Joh 11:9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。」

Joh 11:10 しかし、夜歩けばつまづきます。光がその人のうちにはないからです。」

(1) 弟子たちの認識

①もう一度ユダヤに行くのは、危険である。

②生まれつきの盲人の癒しの後で、ユダヤ人たちはイエスに石を投げようとした。

③そこで弟子たちは、イエスがベタニヤに行かないように説得する。

(2) イエスの認識

①ベタニヤに行くのは、そんなに危険なことではない。

②神の御心の内を歩めば、つまづくことはない。

4. 11～12節

Joh 11:11 イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」

Joh 11:12 そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」

(1) イエスの認識

①ラザロは「わたしたちの友」。イエスの命令を実行する人は、友である。

②ラザロは眠っている。死んだという意味。

*新約聖書では、眠りは肉体の状態に言及する言葉である。

*信者にのみ適用する言葉である。

③眠りからさましに行く。復活させるために行く。

(2) 弟子たちの認識

①眠っているなら、行かなくても助かるでしょう。

②ベタニヤに行かないための口実を設けている。

5. 13～15節

Joh 11:13 しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。

Joh 11:14 そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。」

Joh 11:15 わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいますが、さあ、彼のところへ行きましょう。」

(1) イエスは明確に意図を明らかにされた。

①ラザロは死んだ。

②自分がその場に居合わせなかったことを喜んでいる。

③ラザロの死を喜んでいるのではない。

④もしイエスがそこにいたなら、ラザロは死んでいなかった。

*イエスの前で人が死んだという記録はない。

⑤ラザロが死んでいなかったら、復活の奇跡が行われることもなかった。

(2) イエスは、「あなたがたが信じるためには」と言われる。

①弟子たちはすでに信じていたが、まだ信仰が成長する余地があった。

6. 16節

Joh 11:16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間と言った。「私たちも行って、主と一緒死のうではないか。」

(1) トマスは、疑り深い人物として有名である。

①ここでは、自己犠牲の精神を表明し、リーダーシップを発揮している。

②しかしこれは、落胆から出た開き直りの言葉のようである。

(2) この言葉もまた、アイロニー（皮肉）である。

①彼は、メシアの死と自分たちの死の違いを理解していない。

②彼の意図とは異なるが、結果的に、弟子たちのほぼ全員が殉教の死を遂げる。

II. イエスとマルタ (17～27 節)

1. 17～19 節

Joh 11:17 それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れて四日もたっていた。

Joh 11:18 ベタニヤはエルサレムに近く、三キロメートルほど離れた所にあった。

Joh 11:19 大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところに来ていた。その兄弟のことについて慰めるためであった。

- (1) ラザロは4日間墓に入っていた。
 - ①使者がイエスのところに来るのに1日かかる。
 - ②イエスは、そこに2日留まった。
 - ③イエスがベタニヤに来るのに1日かかった。
 - ④パリサイ人たちは、死者の魂は死後3日間漂っていると教えた。
 - ⑤4日経つということは、蘇生の見込みがなくなったという意味である。
 - ⑥当時の埋葬法は、2段階に分かれていた。
 - *遺体を麻布にくるんで埋葬した。
 - *後に、遺骨を石棺に納めた。

- (2) ベタニヤはエルサレムから3キロメートルほどである。
 - ①エルサレムからも人々が来ていた。
 - ②イエスの公生涯の終わりに起こることを予感させる。

- (3) 大ぜいのユダヤ人が、遺族を慰めるためにそこに来ていた。
 - ①ユダヤ教では、「シバ」(7日間)という習慣が発展した。
 - ②今でも、この習慣が生きている。(例話) 第60回聖地旅行での体験

2. 20～22 節

Joh 11:20 マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。

Joh 11:21 マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

Joh 11:22 今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」

- (1) マルタは行動的であり、マリアは思索的である。

(2) マルタの言葉は、信仰告白である。

①彼女は、イエスは癒しの力を持っていることを信じていた。

*これは、限定的信仰である。イエスは距離を乗り越えて奇跡を行う。

②イエスを責める意図はない。イエスに情報が届く前に、ラザロは死んでいた。

③イエスの上に、神の祝福があることを信じていた。

3. 23～24 節

Joh 11:23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」

Joh 11:24 マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」

(1) イエスの認識

①ラザロはすぐに甦る。

②マルタの信仰を引き上げようとしている。

(2) マルタの認識

①ラザロは、終わりの日に甦る。

4. 25～26 節

Joh 11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

Joh 11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」

(1) 「わたしは、〇〇です」はイエスの神性宣言である。

①「わたしは、よみがえりです。いのちです」は、第5の神性宣言。

(2) イエスのことばのパラドックス

①肉体の死が、新しいいのちをもたらす。

②イエスを信じる者は、肉体的に死んでも、霊的には永遠に生きる。

③霊的いのちは、やがて栄光の体に結びつく。

5. 27 節

Joh 11:27 彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」

(1) マルタの信仰告白

- ①イエスはメシアである。
- ②イエスは神の子である。
- ③イエスは、世に来られるお方である。

「しゅろの木の枝を取って、出迎えのために出て行った。そして大声で叫んだ。
『ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に』
(ヨハ12:13)

(2) マルタの信仰の限界

- ①ラザロがすぐに甦るという信仰はない。

結論

1. 聖書的死の意味

- (1) 死は、罪がもたらした悲劇である。

「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです」(ロマ5:12)

- (2) 肉体の死は、霊的死に関する実物教育である。

*肉体の死は、霊と肉体の分離である。

*霊的死は、神からの分離である。

- (3) イエスは、人々にいのちを与えるために来られた。

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」(ヨハ10:10)

- (4) 2種類の人たちがいる。

「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる」(ヨハ3:36)

- ①イエスを信じて命を得る人たち

- ②イエスを拒否する人たち

*最後は、「火の池」に行く。第2の死である(黙20:14~15)。

2. 光と闇の葛藤

「イエスは答えられた。『昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまづきます。光がその人のうちにないからです』(ヨハ11:9~10)

- (1) これは、ヨハネの福音書のサブテーマである。

(2) 直接的な意味

- ①太陽が出ている時間は、日に12時間ある。
- ②その時間に歩けば、光があるので、歩いてもつまづかない。

(3) 適用

- ①自分は、父なる神の御心の中を歩いている。
- ②それゆえ、安全である。
- ③父なる神の御心の外を歩いている人は、危険な状態にある。
- ④それは、闇の中を歩くことである。
- ⑤神の御心に従っている人には、神が定めた時以外に死が襲うことはない。
- ⑥イエスがおられる間に信じなければ、やがて闇が襲うようになる。

「ラザロの復活」(2)

ヨハ 11 : 28~44

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、ヨルダン川の東側、ペレアで活動している。
- ② ユダヤに行くのは、危険である。国の指導者たちが、イエスの命を狙っていた。
- ③ しかしイエスは、ベタニヤのラザロを助けるために、そこに向かう。
- ④ ベタニヤで、イエスは公生涯最後の大いなる奇跡を行われる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 118 イエスはラザロを死から甦らせる (ヨハ 11 : 1~44)

(3) 死からの復活

- ① これは、厳密には蘇生である。
- ② イエスは、同様の奇跡を行っていた。
- ③ ラザロの復活は、「ヨナのしるし」である。
 - * イエスのメシア性を証明する奇跡
 - * 国の指導者たちは、信仰によって応答しなければならない。

2. アウトライン

- (1) イエスと弟子たち (1~16 節)
 - (2) イエスとマルタ (17~27 節)
 - (3) イエスとマリア (28~32 節)
 - (4) イエスとラザロ (33~44 節)
- (今回は、(3) と (4) を取り上げる)

3. 結論

- (1) 「泣く」と「涙を流す」
- (2) ラザロの復活と実物教育
- (3) いのちを受ける方法

死といのちについて考えてみる。

Ⅲ. イエスとマリア (28~32 節)

1. 28～29節

Joh 11:28 こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」とそっと言った。

Joh 11:29 マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。

(1) マルタの信仰告白

「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております」(27節)

(2) マルタはマリアに、イエスが来ておられることを伝えた。

- ①良き知らせを、耳打ちした。公にならないように。
- ②その地域のラビたちや生徒たちは、可能な限り葬送の列に加わった。
- ③遠方から著名なラビが来ることは、大変な榮譽と考えられた。

2. 30～31節

Joh 11:30 さてイエスは、まだ村に入らないで、マルタが出迎えた場所におられた。

Joh 11:31 マリヤとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだろうと思い、彼女について行った。

(1) イエスは、村に入っていなかった。

- ①マルタとマリアを個人的に励まし、教えを与えようとしておられたのであろう。

(2) 弔問客たちは、マリアの後を追った。

- ①マリアが墓に泣きに行くのだろうと思った。
- ②これで、イエスによる個人教授は不可能となった。

3. 32節

Joh 11:32 マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

(1) マリアはイエスの足もとにひれ伏した。

- ①ルカ 10:39でも、似たようなことが起こっていた。
- ②これは、悲しみの中でマリアが示した自然な反応であろう。

(2) マリアも、マルタと同じことを言っている。

「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」

- ①それ以上は何も言わず、泣き続けた。
- ②マリアにも信仰の限界があった。

IV. イエスとラザロ (33～44 節)

1. 33～34 節

Joh 11:33 そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、

Joh 11:34 言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」

(1) イエスの憤りと動揺

- ① マリアは、墓の前ではなく、イエスの前で泣いている。
- ② ユダヤ人たちの一部は、職業的に泣いていたと思われる。
- ③ イエスは、死がもたらす悲劇、苦しみのことを思われた。
- ④ 罪は、ひとりの人の不従順によって世に入って来た。
- ⑤ 死の恐怖で人々を束縛するサタンに対して憤られた。

(2) イエスは、「彼をどこに置きましたか」と尋ねた。

- ① もちろん、ラザロが埋葬されていることは知っておられた。
- ② 人々の注意を喚起し、期待感を高めるためである。
- ③ 人々は丁寧にイエスを墓まで導いたが、イエスの意図は理解しなかった。

2. 35 節

Joh 11:35 イエスは涙を流された。

(1) 最も短い聖句である。

- ① 墓に向かう途中のことであろう。
- ② イエスの神性を描いている福音書で、イエスの人性の深みに触れる。
- ③ イエスは、マルタとマリアの悲しみに同情し、寄り添われた。
- ④ クリスチャンが葬儀で涙を流すのは、不自然なことではない。

3. 36～37 節

Joh 11:36 そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」

Joh 11:37 しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と言う者もいた。

(1) 人々の解釈

- ① イエスの涙は、ラザロへの愛のしるしである。

- ②盲人の目をあけたのだから、ラザロを死から救うこともできたであろう。
- ③イエスが、さらに大いなる奇跡を行おうとしておられることが理解できない。

4. 38～40節

Joh 11:38 そこでイエスは、またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。

Joh 11:39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」

Joh 11:40 イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」

(1) 墓の形状

- ①ラザロの墓は洞窟に入り、地下に下るようになっていた。
- ②洞窟の入り口に石が立てかけてあった。野獣の侵入を防ぐため。
- ③イエスの墓は、横穴式である。

(2) 劇的な情景

- ①イエスは、「その石を取りのけなさい」と命じる。

*人間にできることは、人間にさせる。

- ②群衆は、その様子を見ている。
- ③マリアは泣いている。
- ④マルタは、反論する。

「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから」

*ラザロは、死んだ日に埋葬された。

*遺体に防腐処理を施していなかったか、簡略的に行ったのであろう。

*ラザロは完全に死んでおり、蘇生の可能性がないことを示している。

(3) マルタに対する権威あることば

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか」(40節)

- ①イエスが「よみがえりであり、いのちである」ことを信じる必要がある。
- ②そうすれば、ラザロは復活し、神の栄光が現れる。信じる → 見る。
- ③マルタとマリアの同意なくして、墓の石を取り除けることはできない。

5. 41～42節

Joh 11:41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたし

の願いを聞いてくださったことを感謝いたします。

Joh 11:42 わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。」

(1) 石が取りのけられた。

①人々は、何が起こるのかとイエスを注視している。

②イエスにとっては、極めて重要な事態である。

*自らが父から遣わされたメシアであることを証明する機会である。

*もしラザロが復活しないなら、イエスの主張には根拠がないことになる。

(2) イエスは、父と子の信頼関係に基づいて祈った。

①事前に、ラザロの復活について感謝している。体験的知識に基づくものである。

②公に祈る理由は、奇跡が起こった時、自分に栄光が来ないようにするため。

③この奇跡は、イエスが父から遣わされた使者であることを証明する。

6. 43～44 節

Joh 11:43 そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」

Joh 11:44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

(1) イエスは大声で叫ばれた。

①ラザロのためではなく、群衆にその声を聞かせるためである。

②ことばで死者を復活させた。

「ラザロよ。出て来なさい」(43 節 b)

③アウグスチヌス:名前を呼ばなければ、付近の墓地から死人がすべて復活した。

(2) ラザロは、長い亜麻布で巻かれてまま出て来た。

①なぜ出て来ることができたのか。これ自体が、奇跡の価値を高めている。

②顔は布切れで包まれていた。これも、彼が死んでいたことの証拠である。

③この奇跡は、「ヨナのしるし」なのである。

(4) 墓石を取りのけることと、布をほどいてやることは、人間の責務である。

①しかし、最大の責務は、この奇跡に信仰的に応答することである。

②ユダヤ人たちがどのように応答したのか、次回学ぶことにする。

結論

1. 「泣く」と「涙を流す」

(1) ヨハ 11 : 33

「そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているの
をご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、」

- ①動詞は、「クライオウ」。大声で泣くこと。
- ②イエスは、エルサレムのために泣かれた(ルカ 19 : 41)。
- ③イエスは、ゲツセマネの園でも泣かれた(ヘブ 4 : 15)。

(2) ヨハ 11 : 35

「イエスは涙を流された」

- ①動詞は、「ダクルオウ」。涙を流すこと。
- ②新約聖書では、この箇所だけに出て来る。
- ③イエスの人間性が現れた箇所である。

2. ラザロの復活と実物教育

(1) イエスは、死人にいのちを与える。

(2) 肉体の復活

①携挙の時(1テサ 4 : 16)

- *キリストにある死者の復活
- *生きている聖徒たちの栄化

②地上再臨の時

- *旧約時代の聖徒たちの復活(ダニ 12 : 2)
- *大患難時代の聖徒たちの復活(黙 20 : 4, 6)

(3) 今の時点では、イエスは霊的に死んでいる人を霊的に生かす。

①エペ 2 : 1~7

Eph 2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、

Eph 2:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。

Eph 2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

Eph 2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、

Eph 2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——

Eph 2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

Eph 2:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。

3. いのちを受ける方法

(1) ヨハ 11 : 28

Joh 11:28 こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」とそっと言った。

①先生 (ディダスカロス)

「あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです」(ヨハ 13 : 13)

②このタイトルは、師と弟子たちの親密な交流を示唆している。

③当時のユダヤ的文脈では、ラビが婦人に教えるのは稀なことである。

(2) イエスは、私たちひとりひとりを呼んでおられる。

①マリアはすぐに応答した。

②「エケイネ」には、強調がある。マリアと訳されている。

(3) 自らの心を閉ざしている石を取り除け。